

## (12)特許協力条約に基づいて公開された国際出願

(19) 世界知的所有権機関  
国際事務局(43) 国際公開日  
2004年10月21日 (21.10.2004)

PCT

(10) 国際公開番号  
WO 2004/089197 A1(51) 国際特許分類<sup>7</sup>:

A61B 1/24

(21) 国際出願番号:

PCT/JP2004/004861

(22) 国際出願日:

2004年4月2日 (02.04.2004)

(25) 国際出願の言語:

日本語

(26) 国際公開の言語:

日本語

(30) 優先権データ:

特願2003-99917 2003年4月3日 (03.04.2003) JP

(71) 出願人(米国を除く全ての指定国について): 花王株式会社 (KAO CORPORATION) [JP/JP]; 〒103-8210 東京都中央区日本橋茅場町一丁目14番10号 Tokyo (JP).

(72) 発明者; および

(75) 発明者/出願人(米国についてのみ): 山岸 敦 (YAMAGISHI,Atsushi) [JP/JP]; 〒131-0044 東京都墨田区文花2-1-3 花王株式会社研究所内 Tokyo (JP).

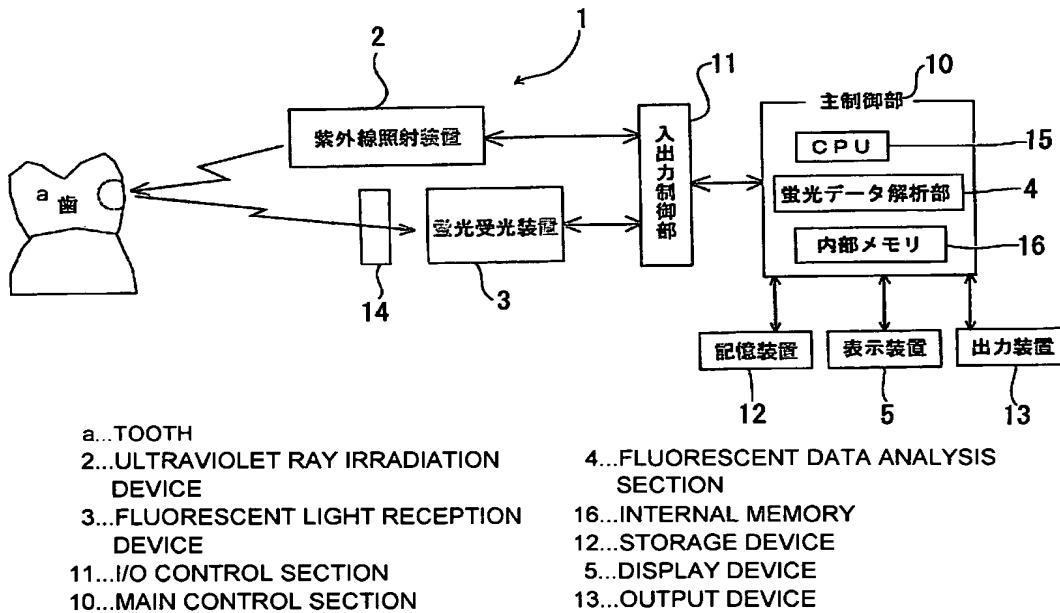
(74) 代理人: 羽鳥 修, 外(HATORI,Osamu et al.); 〒107-0052 東京都港区赤坂一丁目8番6号 赤坂HKNビル6階 Tokyo (JP).

(81) 指定国(表示のない限り、全ての種類の国内保護が可能): AE, AG, AL, AM, AT, AU, AZ, BA, BB, BG, BR, BW, BY, BZ, CA, CH, CN, CO, CR, CU, CZ, DE, DK, DM, DZ, EC, EE, EG, ES, FI, GB, GD, GE, GH, GM, HR, HU, ID, IL, IN, IS, KE, KG, KP, KR, KZ, LC, LK, LR, LS, LT, LU, LV, MA, MD, MG, MK, MN, MW, MX, MZ, NA, NI, NO, NZ, OM, PG, PH, PL, PT, RO, RU, SC, SD, SE, SG,

/ 続葉有 /

(54) Title: CARIOUS TOOTH DETECTION DEVICE

(54) 発明の名称: 虫歯検出装置



(57) Abstract: A carious tooth detection system (1) includes an ultraviolet ray irradiation device (2), a fluorescent light reception device (3) for receiving fluorescent light from a tooth caused by the ultraviolet rays irradiated from the ultraviolet ray irradiation device (2), a fluorescent data analysis section (4) for analyzing the fluorescent data transmitted from the fluorescent light reception device (3), and a display device (5) for displaying the analysis data obtained by the fluorescent data analysis section (4). The fluorescent light data analysis section (4) is configured so as to analyze the fluorescent data according to the fluorescent light intensity in at least two wavelength bands of the visible light region.

(57) 要約: 本発明の虫歯検出システム1は、紫外線照射装置2と、紫外線照射装置2から照射された紫外線により歯からの蛍光を受光する蛍光受光装置3と、蛍光受光装置3から送信された蛍光データを解析する

/ 続葉有 /



SK, SL, SY, TJ, TM, TN, TR, TT, TZ, UA, UG, US, UZ, VC, VN, YU, ZA, ZM, ZW.

NL, PL, PT, RO, SE, SI, SK, TR), OAPI (BF, BJ, CF, CG, CI, CM, GA, GN, GQ, GW, ML, MR, NE, SN, TD, TG).

(84) 指定国(表示のない限り、全ての種類の広域保護が可能): ARIPO (BW, GH, GM, KE, LS, MW, MZ, SD, SL, SZ, TZ, UG, ZM, ZW), ユーラシア (AM, AZ, BY, KG, KZ, MD, RU, TJ, TM), ヨーロッパ (AT, BE, BG, CH, CY, CZ, DE, DK, EE, ES, FI, FR, GB, GR, HU, IE, IT, LU, MC,

添付公開書類:

— 国際調査報告書

2文字コード及び他の略語については、定期発行される各PCTガゼットの巻頭に掲載されている「コードと略語のガイダンスノート」を参照。

## 明細書

## 虫歯検出装置

## 技術分野

5

本発明は、虫歯を検出する技術に関し、特に、歯からの蛍光情報に基づいて非破壊的に初期段階の虫歯を検出する技術に関する。

## 背景技術

10

光を用いて虫歯を検出する従来技術として、技術文献1（特開平2001-299699号公報）に記載された装置がある。かかる装置は、赤色光（600～670nm）を励起光として歯に照射し、その歯からの蛍光をフォトダイオードにより受光した光の強度のみを測定するものである。また、前記装置は口腔内細菌由来の蛍光により虫歯を検出するものであるため、虫歯が進行し歯に穴が開いてしまい、その中に細菌が繁殖しているような場合には虫歯の検出が可能である。

しかしながら、初期虫歯の進行度合いは、必ずしも細菌の存在及びその量とは相関していない。特に初期虫歯の場合は、該当箇所に口腔用組成物内細菌が検出されないことがむしろ多いため、前記特許文献1に記載の装置でかかる初期虫歯を検出することは困難である。すなわち、このような蛍光情報によって解析した結果は、口腔内細菌の有無等によって左右されるため、初期虫歯の有無を正確に判断することが困難である。

上記技術文献1の問題を解決すべく、技術文献2（Stookey, G. K., et al. Dental caries diagnosis, Dent Clin North Am., 43:665-77, 1999.）及び技術文献3（Shi X.Q, et al. Comparison of QLF and DIAGNODent for quantification of smooth surface caries, Caries Res., 35(1):21-6, 2001.）に記載されたQLF（quantitative light-induced fluorescence）方法及びこの方法を実現させた装置が開発されている。この装置は、380

± 7 0 n m の紫外線で照射し、得られた 5 2 0 n m 以上の蛍光の強さのみ検出するものであり、虫歯部位からの蛍光強度が歯の健常部位からの蛍光強度に比較して弱くなるという現象を利用して虫歯を検出するものである。この場合の虫歯検出は、細菌の存在に影響を受けないため、上記技術文献 5 1 に開示の装置と比較して虫歯の有無の検出をより正確にできるようになっている。しかし、後述の比較例 2 に示すとおり、実際のミネラル減少率の変化と上記 5 2 0 n m 以上蛍光強度の変化とは一致しないため、初期虫歯の進行度合を計測することは困難である。

さらに、技術文献 4 (欧州特許出願公開第 0 5 5 5 6 4 5 号明細書) には、虫歯を検出する装置として、3 6 0 ~ 5 8 0 n m の紫外線を歯に照射し、歯からの 6 2 0 m n 以上の蛍光を測定する装置が記載されている。この装置は虫歯部位に特異的な赤色蛍光のみを測定対象とするものであり、上記技術文献 1 のように、口腔内細菌まで検出してしまうことはない。しかし、上記技術文献 4 に記載の装置は、蛍光強度の弱い赤色蛍光のみを測定対象とするため、虫歯の有無を検出するのに蛍光強度が不十分で外光などの計測環境の影響を受けやすく検出感度が低くなるという問題がある。

他方、虫歯の進行度合いを正確に検出し定量できる技術として、技術文献 5 (好川正ら、「エナメル質の脱灰におよぼす 0. 1 M 乳酸の pH ならびに作用時間の影響」, 口腔衛生学会雑誌, 1990, 第 40 卷, p. 671 ~ 677) に記載された技術がある。この技術は、抜去した虫歯をスライスし、その断面をマイクロ X 線写真で撮影し、前記写真における情報に基づいて、健常歯と比較しつつ、ミネラル減少率を算出し、虫歯の進行状況を定量するものである。かかる方法は、確実に虫歯の進行状況を確認することが可能であるが、歯を抜去およびスライスしなければ、測定すること 25 ができないという問題がある。

したがって、初期虫歯を感度良くかつ正確に検出し、虫歯の進行度合をも検出できる虫歯検出装置及び虫歯検出方法が望まれていた。

本発明者等は、歯に紫外光（水銀ランプの i 線 365 nm）を照射した場合、健常歯については、400～500 nm付近（青色相当）に強い蛍光が生じるのに対し、虫歯については、400～500 nm付近の蛍光が弱くなり、その一方で、600～800 nm付近（赤色相当）に蛍光が生じることを知見した。

また、本発明者等は、紫外光の照射光強度を減少させた場合、虫歯については、青色相当及び赤色相当の蛍光が弱くなるのに対し、健常歯については、青色相当の蛍光が弱くなるものの、赤色相当の蛍光が強くなること 10 を知見した。

本発明は、上記知見に基づいてなされたものであり、紫外線光源と、該紫外線光源から照射された紫外線により歯からの蛍光を受光する蛍光受光部と、該蛍光受光部から送信された蛍光データを解析する蛍光データ解析部と、該蛍光データ解析部により解析された解析データを表示する解析データ表示部とを備えた虫歯検出装置であって、前記蛍光データ解析部は、前記蛍光データを可視光領域の 2 以上の波長帯における蛍光強度に基づいて解析をする虫歯検出装置である。

本発明に係る検出装置を用いることにより、初期虫歯を感度よく検出することが出来るため、初期虫歯を削らずに非外科的な処置による治療がよりしやすくなる。さらに、本発明に係る虫歯検出装置は、虫歯の進行度合いも計測することができる。前記初期虫歯の治療経過の観察が可能になり、その回復の度合いの確認ができるため、患者に虫歯の進行状況や回復状況を具体的に示すことができる。さらに、虫歯予防処置の重要性や処置の効果に関する理解を得ることができ、口腔の健康の維持向上に貢献すること 25 が可能になる。

本発明に係る虫歯検出装置により、歯の表面を計測することによって、虫歯を精度良く検出できるのみならず、歯の隙間等のような計測が困難な部位や（1カ所で計測）、歯の健常部位と虫歯部位との対比測定（2カ所で計測）をも行うことが可能である。また、これらの蛍光データを可視光

領域の2以上の波長帯における蛍光強度に基づいて解析をすることにより、虫歯（特に初期虫歯）とその進行度合いを感度良く正確に検出することができる。

また、本発明に係る虫歯検出装置により、紫外線の照射光強度の変化に伴って変化する歯からの蛍光データの中から、虫歯と健常歯とで異なる変化を示す波長帯を選択し、その波長帯における複数の蛍光強度に基づいて解析することができ、それによって虫歯（特に初期虫歯）とその進行度合いを感度良く正確に検出することができる。

本発明において、「第1波長帯」とは、赤色相当の波長のみならず、緑色相当の波長まで含めた、550～810nmの波長帯から選ばれる任意の波長幅を有する波長帯を意味する。「第2波長帯」とは、青色相当の波長のみならず、緑色相当の波長まで含めた、380～550nmの波長帯から選ばれる任意の波長幅を有する波長帯を意味する。「第3波長帯」とは、緑色相当の波長のみならず、赤色相当の波長及び青色相当の波長まで含めた、450～650nmの波長帯から選ばれる任意の波長幅を有する波長帯を意味する。

第1波長帯の波長幅は0.1nm以上260nm以下であって、好ましくは10nm以上260nm以下であり、さらに好ましくは50nm以上260nm以下である。第2波長帯の波長幅は0.1nm以上170nm以下であって、好ましくは10nm以上170nm以下であり、さらに好ましくは50nm以上170nm以下である。第3波長帯の波長幅は0.1nm以上200nm以下であって、好ましくは10nm以上200nm以下であり、さらに好ましくは50nm以上200nm以下である。

また、バンドパスフィルタを使用して蛍光データを複数の波長帯に分割する場合は、そのフィルタの性能により、波長帯に含む波長の数値範囲が変化し得る。たとえば、すでにバンドパスフィルタが素子に組み込まれている原色カラーCCDを用いた場合に、第1波長帯（赤色相当）は、中心波長が650±50で、第2波長帯（青色相当）は、中心波長が450±50で、第3波長帯（緑色相当）は、中心波長が550±50が代表的で

あるが、これらの波長には限定されず、フィルタの特性により、前記各波長帯は、相互に波長の範囲が重なる場合も含む。

第1波長帯の中心波長と第3波長帯の中心波長は、10nm以上離れていることが好ましく、20nm以上離れていることがさらに好ましい。また、第2波長帯の中心波長と第3波長帯の中心波長についても、10nm以上離れていることが好ましく、20nm以上離れていることがさらに好ましい。なお、中心波長とはバンドパスフィルタの二点の相対透過率が50%のポイント間の中間の波長を意味する。

また、図1（フィルタ特性）に示すフィルタの場合は、赤色の波長帯は、350～450及び550～750であり、これらも本願の第1波長帯に含むものとする。

#### 図面の簡単な説明

15 図1は、カラーCCDのフィルタ特性を示す図である。

図2は、本実施形態の虫歯検出システムの概略構成を示す図である。

図3は、本実施形態の虫歯検出プログラムに基づいて虫歯検出処理（メイン処理及び単一部位測定処理）を示すフローチャートである。

20 図4は、本実施形態の虫歯検出プログラムに基づいて虫歯検出処理（単一部位測定処理、CD<sub>1</sub>）を示すフローチャートである。

図5は、本実施形態の虫歯検出プログラムに基づいて虫歯検出処理（対比測定処理、CD<sub>2</sub>）を示すフローチャートである。

図6は、本実施形態の虫歯検出プログラムに基づいて虫歯検出処理（光強度変化測定処理）を示すフローチャートである。

25 図7は、本実施形態の虫歯検出プログラムに基づいて虫歯検出処理（光強度変化測定処理、CD<sub>3</sub>）を示すフローチャートである。

図8は、本実施形態の虫歯検出プログラムに基づいて虫歯検出処理（光強度変化測定処理、CD<sub>4</sub>）を示すフローチャートである。

図9は、本実施形態の虫歯検出プログラムに基づいて虫歯検出処理（光

強度変化測定処理、CD<sub>5</sub>) を示すフローチャートである。

図10の(a)～(f)は、実施例1～4に用いられる光強度及び輝度の関係を示す。(a)は、健常歯部位(軽)について示すグラフ、(b)は、健常歯部位(中)について示すグラフ、(c)は、健常歯部位(重)について示すグラフ、(d)は、虫歯の軽度部位について示すグラフ、(e)は、虫歯の中等度部位について示すグラフ、(f)：虫歯の重度部位について示すグラフである。

#### 発明の詳細な説明

10

以下、本発明の虫歯検出装置及び虫歯検出方法並びに虫歯検出プログラムの好ましい実施形態について図面を参照して説明する。

図2に示すように、本実施形態の虫歯検出システム(虫歯検出装置)1は、紫外線照射装置(紫外線光源)2と、紫外線照射装置2から照射された紫外線により歯からの蛍光を受光する蛍光受光装置(蛍光受光部)3と、蛍光受光装置3から送信されたデータを解析するデータ解析部4と、データ解析部4により解析された解析データを表示する表示装置(解析データ表示部)5とを備えている。

データ解析部4は、蛍光データを可視光領域の2以上の波長帯に分割し、20それぞれの波長帯における蛍光強度に基づいて解析ができるように構成されている。

まず、かかる虫歯検出システム1を詳細に述べる。

虫歯検出システム1は、このシステム全体を統括的に制御する主制御部10(詳細後述)を有する。この主制御部10には、入出力制御部11を介して、紫外線照射装置2、及び蛍光受光装置3が接続されていると共に、記憶装置12、表示装置5、及び出力装置13が接続されている。

紫外線照射装置2は、波長が300～400nm程度の紫外線を照射するもので、照射光強度が調整可能に構成されていればよい。このような紫外線照射装置2には、例えば、紫外線LED、水銀ランプ、メタルハライ

ドランプ等がある。紫外線LEDは、紫外線の照射光強度が調整されるように構成されている。例えば、通電量に関して入出力制御部11で制御する、もしくは複数のLEDの点灯個数を変えることにより、光の強度調整を行う。

5 水銀ランプ又はメタルハライドランプは、照射光が可視光カットフィルタを通過して紫外光になり、その紫外光の強度が調整できるようになっている。強度調整は例えば電流値の制御やNDフィルタを用いることにより行う。

そして、このような紫外線照射装置2から紫外線を導光するものとして10は、紫外線吸収率が低いものであれば特に限定はないが、例えば石英ガラスや高分子材料からなるコアを有する光ファイバを通して歯に直接照射されるようになっている。

15 蛍光受光装置3は、紫外線の照射により歯からの蛍光が、紫外線カットフィルタ14を通過することにより紫外線領域の光が吸収され、可視光領域の光のみが、光ファイバを通して光デバイスに受光されるように構成されている。

光デバイスは、可視光領域の蛍光から、色情報を含んだ情報を蛍光データとして取り込み、その情報を入出力制御部11に送信可能なものであればよい。入出力制御部11は、光デバイスからの情報をA/D変換するよう20に構成されている。

上述の光デバイスには、例えば、分光輝度計、カラーCCD、CMOS、又は2色以上の色フィルタ付き光センサ等がある。

具体的には、分光輝度計は、蛍光をプリズム等により色分解し、各色光（赤色光、緑色光、青色光等）を光センサ取り込むことにより、各色毎の25情報を得るように構成されている。

また、カラーCCDは、色フィルタ（原色RGB、補色CMYG）を有する2次元配列された素子で受光し、それぞれの素子からの電気信号に基づいて色情報を得るように構成されている。

さらに、2色以上の色フィルタ（バンドパスフィルタ）付き光センサは、

蛍光の特定波長のみを、例えば、フォトマルやシリコンフォトダイオードのような受光素子からの電気信号に基づいて各波長帯毎の情報を得るよう構成されている。

記憶装置は、データ解析部4により解析された解析データを保存できるものであればよく、例えば、ハードディスク、フレキシブルディスク、光ディスク等がある。

表示装置5は、上記解析データや解析データの選択（測定部位の数、光強度の変化）に必要な情報を表示できるものであればよく、例えば、CRTディスプレイ、液晶ディスプレイ等がある。

10 出力装置13は、上記解析データを出力できるものであればよく、例えば、プリンタ等がある。

主制御部10は、CPU15、内部メモリ16、蛍光データ解析部4等を有する。CPU15は、OS(Operating System)等の制御プログラムや虫歯検出プログラムからの命令を解読して実行するよう構成されている。15 内部メモリ16は、入出力制御部11からの情報や、記憶装置12からの解析データを一時的に保存するものである。

蛍光データ解析部4は、虫歯検出プログラムがCPU15により実行されることにより、虫歯検出プログラムと、CPU15、メインメモリ等のハードウェア資源（コンピュータ）とが協働した手段として構成されている。

そして、虫歯検出プログラムは、CPU15に実現させる機能として、測定部位数選択機能、光強度変化機能、データ取込機能、波長帯選択機能、虫歯度合演算機能、虫歯有無・進行度合判断機能等を有し、これらの機能により、以下に述べる虫歯検出方法が構築される。

25 次に、本実施形態の虫歯検出方法を、虫歯検出プログラムの諸機能と関連させつつ、図3～図9を参照して説明する。

虫歯検出方法は、メイン処理(S1～S3、S5)を共通にし、検出目的や検出方法の違いにより、単一部位測定方法(S4、S11～S19)、対比測定方法(S21～S30)、光強度変化測定方法(S31～S35)、

S 4 1 ~ S 4 8 、 S 5 1 ~ S 5 8 、 S 6 1 ~ S 6 8 ) の 3 通りに大別される。

单一部位測定方法は、外から見える虫歯部位又は虫歯と疑われる部位や、特に歯の隙間や噛み合わせ等のような見えない虫歯部位の虫歯の有無又は 5 その虫歯の進行度合を検出する方法で、虫歯部位と思われる 1箇所を 1 回以上測定する。

対比測定方法は、外から見える虫歯部位又は虫歯と疑われる部位（単に「虫歯部位」とする）の虫歯の有無又はその虫歯の進行度合を検出する方法で、同一の歯における虫歯部位と健常部位の 2 箇所をそれぞれ独立して 10 測定する。

光強度変化測定方法は、外から見えるか否かにかかわらず虫歯の有無及びその虫歯の進行度合の検出する方法で、紫外線の照射光強度を変化させつつ、虫歯部位と思われる同一箇所を複数回測定する。

具体的には、図 3 に示すように、C P U 1 5 が、測定するか否かを表示 15 装置 5 に表示させ（S 1）、測定する場合には、虫歯検出プログラムの測定部位数選択機能に基づき、測定部位の数が「1」であるか否かを表示させる（S 2）。

測定部位の数が「1」でない場合には、「対比測定方法」の処理に分岐 20 し（分岐 B、詳細後述）、測定部位の数が「1」である場合には、C P U 1 5 が、虫歯検出プログラムの光強度変化選択機能に基づき、光源の光強度を変化させるか否かを表示させる（S 3）。

光源の光強度を変化させる場合には、「光強度変化測定方法」の処理に分岐し（分岐 C、詳細後述）、光源の光強度を変化させない場合には、C P U 1 5 が、「单一部位測定方法」の処理を実行する。

25 ここで、单一部位測定方法においては、まず、測定者が、紫外線照射装置 2 を用いて、対象部位に照射し、蛍光受光装置 3 を用いて、歯からの蛍光より情報を得る。

次いで、C P U 1 5 が、虫歯検出プログラムのデータ取込機能に基づき、光デバイスからの情報を、入出力制御部 1 1 により A D 変換されたデジタ

ル信号として内部メモリ 16 に取り込み、そのデジタル信号を、第 1 ～ 第 3 波長帯毎の輝度（蛍光強度）R、B、G を内部メモリ 16 に記憶する（S4）。

ここに、第 1 波長帯（赤色相当）は、可視光領域（380 ～ 810 nm）において、波長が、550 ～ 810 nm であることが好ましく、より好ましくは、600 ～ 700 nm である。

また、第 2 波長帯（青色相当）は、可視光領域において、波長が、380 ～ 550 nm であることが好ましく、より好ましくは、400 ～ 500 nm である。

10 さらに、第 3 波長帯（緑色相当）は、可視光領域において、波長が、450 ～ 650 nm であることが好ましく、より好ましくは、500 ～ 600 nm である。

その後、図 4 に示すように、CPU15 が、虫歯検出プログラムの虫歯度合演算機能に基づき、輝度 R、B、G を求め、その値を次の式（1）に 15 従って虫歯度合 CD<sub>1</sub> を演算する（S11）。

$$CD_1 = R / B \cdots \text{式 (1)}$$

この虫歯度合 CD<sub>1</sub> は、虫歯の進行に伴って、虫歯部位につき、輝度 R が増加する一方で、輝度 B、G が減少するという特性を利用し、虫歯の進行度合を定量的な増加関数として表したものである。

20 ここでは、輝度 B の絶対的強度が輝度 G より大きいため、外光等の影響を受けにくくノイズが小さいため、虫歯度合 CD<sub>1</sub> をより高い精度で算出できる。

また、輝度 B の代わりに輝度 G を用いて次の式（1. 2）に従って虫歯度合 CD<sub>1,2</sub> を演算してもよい。

$$CD_{1,2} = R / G \cdots \text{式 (1. 2)}$$

S12 ～ S19 の処理は、CPU15 が虫歯検出プログラムの虫歯有無・進行度合判断機能に基づいて実行する処理である。

S12 では、虫歯度合 CD<sub>1</sub> を、下限しきい値 E<sub>1</sub> と比較する。ここに、「下限しきい値」とは、健常歯と虫歯（特に初期虫歯、以下同じ）とを判

別するための値で、紫外線照射装置2における照射光強度、照射面積等の条件や、蛍光受光装置3における光路長、受光素子の感度等の条件によつて異なり、虫歯検出システム1におけるキャリブレーションによって決定される。

5 虫歯度合CD<sub>1</sub>が、下限しきい値E<sub>1</sub>より小さい、又は下限しきい値E<sub>1</sub>と等しい場合には、健常歯である旨（解析データ）を表示してメイン処理のS1に戻り（S18、19）、虫歯度合CD<sub>1</sub>が下限しきい値E<sub>1</sub>より大きい場合には、虫歯である旨（解析データ）を表示する（S13）。

S14では、虫歯度合CD<sub>1</sub>を、上限しきい値F<sub>1</sub>と比較する。ここに、  
10 「上限しきい値」とは、軽度の虫歯と重度の虫歯とを判別するための値で、上記下限しきい値と同様に決定される。

虫歯度合CD<sub>1</sub>が上限しきい値F<sub>1</sub>より小さい場合には、軽度の初期虫歯である旨（解析データ）を表示し（S15）、虫歯度合CD<sub>1</sub>が、上限しきい値F<sub>1</sub>より大きい、又は下限しきい値F<sub>1</sub>と等しい場合には、重度の初期虫歯である旨（解析データ）を表示し（S16）、メイン処理のS1に戻る（S17）。

上記S2において、測定部位の数が「1」でない場合には、CPU15が、「対比測定方法」の処理を実行する。

ここで、対比測定方法においては、まず、測定者が、紫外線照射装置2を用いて、紫外線を、同一の歯において、虫歯部位（虫歯と疑われる部位）と、その近傍の健常部位とにそれぞれ照射し、蛍光受光装置3を用いて、虫歯部位の蛍光から第1情報を得ると共に、健常部位の蛍光から第2情報を得る。

次いで、図5に示すように、CPU15が、虫歯検出プログラムのデータ取込機能に基づき、光デバイスからの第1、第2情報を、それぞれ、入出力制御部11によりA/D変換されたデジタル信号として内部メモリに取り込み、それぞれのデジタル信号を、虫歯検出プログラムの波長帯選択機能に基づき、第1～第3波長帯毎に分解した、虫歯部位の輝度（R<sub>c</sub>、B<sub>c</sub>、G<sub>c</sub>）、健常部位の輝度（R<sub>n</sub>、B<sub>n</sub>、G<sub>n</sub>）を、それぞれ内部メモリ16

に記憶する (S 2 1)。

その後、CPU15が、虫歯検出プログラムの虫歯度合演算機能に基づき、虫歯部位の輝度 ( $R_c$ 、 $B_c$ 、 $G_c$ )、及び健常部位の輝度 ( $R_n$ 、 $B_n$ 、 $G_n$ ) のそれぞれの平均値を求め、それぞれの平均値を次の式 (2) に従って虫歯度合  $CD_2$  を演算する (S 2 2)。

$$CD_2 = |R_n - R_c| \times |B_n - B_c| \dots \text{式 (2)}$$

この虫歯度合  $CD_2$  は、虫歯の進行に伴って、虫歯部位の輝度  $R_c$  が健常部位の輝度  $R_n$  より大きくなり、かつ、虫歯部位の輝度  $B_c$ 、 $G_c$  が健常部位の輝度  $B_n$ 、 $G_n$  より小さくなるという特性を利用し、虫歯の進行度合を定量的な増加関数として表したものである。

ここでは、輝度  $B$  の絶対的強度が輝度  $G$  より大きいため、外光等の影響を受けにくくノイズが小さいため、虫歯度合  $CD_1$  の精度を高める観点から、輝度  $G$  を用いていないが、単に輝度  $R$  との比較の観点からでは、輝度  $B$  の代わりに輝度  $G$  を用いて次の式 (2. 2) に従って虫歯度合  $CD_{22}$  を演算したり、輝度  $B$  と共に輝度  $G$  を用いて次の式 (2. 3) に従って虫歯度合  $CD_{23}$  を演算してもよい。

$$CD_{22} = |R_n - R_c| \times |G_n - G_c| \dots \text{式 (2. 2)}$$

$$CD_{23} = |R_n - R_c| \times \{ |B_n - B_c| + |G_n - G_c| \} \dots \text{式 (2. 3)}$$

S 2 3～S 3 0 の処理は、CPU15が虫歯検出プログラムの虫歯有無・進行度合判断機能に基づいて実行する処理であり、上記 S 1 2～S 1 9 の処理とほぼ同様である。

S 2 3 では、虫歯度合  $CD_2$  を、下限しきい値  $E_2$  と比較する。

虫歯度合  $CD_2$  が、下限しきい値  $E_2$  より小さい、又は下限しきい値  $E_2$  と等しい場合には、健常歯である旨を表示してメイン処理の S 1 に戻り (S 2 9、S 3 0)、虫歯度合  $CD_2$  が下限しきい値  $E_2$  より大きい場合には、虫歯である旨を表示する (S 2 4)。

S 2 5 では、虫歯度合  $CD_2$  を、上限しきい値  $F_2$  と比較する。

虫歯度合  $CD_2$  が上限しきい値  $F_2$  より小さい場合には、軽度の初期虫歯

である旨を表示し（S 2 6）、虫歯度合  $C D_2$  が、上限しきい値  $F_2$  より大きい、又は上限しきい値  $F_2$  と等しい場合には、重度の初期虫歯である旨を表示し（S 2 7）、メイン処理の S 1 に戻る（S 2 8）。

上記 S 3 において、光源の光強度を変化させる場合には、C P U 1 5 が、

5 「光強度変化測定方法」の処理を実行する。

ここで、光強度変化測定方法においては、まず、測定者が、紫外線照射装置 2 を用いて、光強度  $U_1$ 、 $U_2$  ( $U_1 > U_2$ ) を変化させた紫外線を、同一歯の同一部位にそれぞれ照射し、蛍光受光装置 3 を用いて、光強度  $U_1$  についての蛍光から第 1 情報を得ると共に、光強度  $U_2$  についての蛍光から第 2 情報を得る。

次いで、図 6 に示すように、C P U 1 5 が、虫歯検出プログラムのデータ取込機能に基づき、光デバイスからの第 1、第 2 情報を、それぞれ、入出力制御部 1 1 により A D 変換されたデジタル信号として内部メモリ 1 6 に取り込み、それぞれのデジタル信号を、第 1 ～ 第 3 波長帯毎の光強度  $U_1$  についての輝度 ( $R_1$ 、 $B_1$ 、 $G_1$ )、光強度  $U_2$  についての輝度 ( $R_2$ 、 $B_2$ 、 $G_2$ ) を、それぞれ内部メモリ 1 6 に記憶する（S 3 1、S 3 2）。光強度は 2 つに限定されるものではなく、2 つ以上であってもよい。

その後、C P U 1 5 が、虫歯検出プログラムの虫歯有無・進行度合判断機能に基づき、光強度  $U_1$  の輝度  $R_1$  と、光強度  $U_2$  の輝度  $R_2$  との大小関係、すなわち、( $R_1 - R_2$ ) の符号が「正 (+)」であるか否かを判断し（S 3 3）、「正 (+)」の場合には、虫歯の可能性がある旨を表示し（S 3 4）、「負 (-)」の場合には、健常歯である旨を表示してメイン処理の S 1 に戻る（S 3 5）。判別方法はこれに限らず、複数の輝度データと照射強度との相関関係を求め、その相関が「正」である場合は虫歯、「負」である場合は健常と判断する方法を用いてもよい。

S 3 3 ～ S 3 5 の処理は、虫歯部位については、輝度  $R_2$  が輝度  $R_1$  より小さくなる（紫外線照射強度に正の相関）のに対し、健常部位については、輝度  $R_2$  が輝度  $R_1$  より大きくなる（紫外線照射強度に負の相関）という特性を利用し、虫歯の進行度合を判断する前に、虫歯の有無を判断したもの

である。

S 3 4 に進んだ後の処理は、虫歯度合の演算処理の違いにより、虫歯度合  $CD_3$  の処理（分岐  $D_1$ 、S 4 1～S 4 8）、虫歯度合  $CD_4$  の処理（分岐  $D_2$ 、S 5 1～S 5 8）、虫歯度合  $CD_5$  の処理（分岐  $D_3$ 、S 6 1～S 5 6 8）の 3 つに分岐する。

図 7 に示すように、虫歯度合  $CD_3$  の処理においては、CPU 1 5 が、虫歯検出プログラムの虫歯度合演算機能に基づき、光強度  $U_1$  の輝度（ $R_1$ 、 $B_1$ 、 $G_1$ ）、及び光強度  $U_2$  の輝度（ $R_2$ 、 $B_2$ 、 $G_2$ ）のそれぞれの値を求める、それぞれの値を次の式（3）に従って虫歯度合  $CD_3$  を演算する（S 10 4 1）。

$$CD_3 = (R_1 / R_2) \times (B_1 / B_2) \dots \text{式 (3)}$$

この虫歯度合  $CD_3$  は、虫歯部位については、輝度  $R_2$ 、 $B_2$ 、 $G_2$  が、それぞれ、輝度  $R_1$ 、 $B_1$ 、 $G_1$  より小さくなるのに対し、健常部位については、輝度  $B_2$ 、 $G_2$  が、それぞれ、輝度  $B_1$ 、 $G_1$  より小さくなるものの、15 輝度  $R_2$  が輝度  $R_1$  より大きくなるという特性を利用し、虫歯の進行度合を関数として表したものである。

S 4 2～S 4 8 の処理は、CPU 1 5 が虫歯検出プログラムの虫歯有無・進行度合判断機能に基づいて実行する処理であり、上記 S 2 3～S 3 0 の処理とほぼ同様である。

20 S 4 2 では、虫歯度合  $CD_3$  を、上限しきい値  $F_3$  と比較する。虫歯度合  $CD_3$  が、上限しきい値  $F_3$  より大きい、又は上限しきい値  $F_3$  と等しい場合には、健常歯である旨を表示してメイン処理の S 1 に戻り（S 4 7、4 8）、虫歯度合  $CD_3$  が、上限しきい値  $F_3$  より小さい場合には、S 4 3 に進む。

25 S 4 3 では、虫歯度合  $CD_3$  を、下限しきい値  $E_3$  と比較する。虫歯度合  $CD_3$  が下限しきい値  $E_3$  より大きい場合には、軽度の初期虫歯である旨を表示し（S 4 4）、虫歯度合  $CD_3$  が、下限しきい値  $E_3$  より小さい、又は下限しきい値  $E_3$  と等しい場合には、重度の初期虫歯である旨を表示し（S 4 5）、メイン処理の S 1 に戻る（S 4 6）。

図8に示すように、虫歯度合CD<sub>4</sub>の処理においては、上記虫歯度合CD<sub>3</sub>の処理の比較した場合、S51の処理のみが異なる。

S51では、光強度U<sub>1</sub>の輝度(R<sub>1</sub>、B<sub>1</sub>、G<sub>1</sub>)、及び光強度U<sub>2</sub>の輝度(R<sub>2</sub>、B<sub>2</sub>、G<sub>2</sub>)のそれぞれの値を次の式(4)に従って虫歯度合CD<sub>4</sub>を演算する。

$$CD_4 = (R_1 / R_2) \times (G_1 / G_2) \cdots \text{式 (4)}$$

その他の処理は、上記同様であるので説明を省略する。

図9に示すように、虫歯度合CD<sub>5</sub>の処理においては、上記虫歯度合CD<sub>3</sub>の処理の比較した場合、S61、S62、S63の処理のみが異なる。

S61では、光強度U<sub>1</sub>の輝度(R<sub>1</sub>、B<sub>1</sub>、G<sub>1</sub>)、及び光強度U<sub>2</sub>の輝度(R<sub>2</sub>、B<sub>2</sub>、G<sub>2</sub>)のそれぞれの値を次の式(5)に従って虫歯度合CD<sub>5</sub>を演算する。

$$CD_5 = (R_1 / R_2) \times \{ (B_1 / B_2) + (G_1 / G_2) \} \cdots \text{式 (5)}$$

S62では、上限しきい値F<sub>5</sub>の設定の仕方が異なり、S63では、下限しきい値E<sub>5</sub>の設定の仕方が異なる。その他の処理は、上記同様であるので説明を省略する。

このような光強度変化測定方法においては、図示しないが、上記虫歯度合CD<sub>3</sub>、CD<sub>4</sub>、CD<sub>5</sub>のほか、次の式(6)に従って虫歯度合CD<sub>6</sub>を演算してもよい。

$$CD_6 = (R_1 / R_2) \times (B_1 / B_2) \times (G_1 / G_2) \cdots \text{式 (6)}$$

以上述べたように、本実施形態によれば、虫歯検出方法において、虫歯度合CDを、エネルギー値の高低にわたる輝度R、B、Gに基づいて定量的な関数で表し、その虫歯度合CDを下限しきい値E及び上限しきい値Fと比較することにより、細菌の侵襲を受けていない初期段階の虫歯について、「健常歯」、「軽度の虫歯」又は「重度の虫歯」の何れであるかの判断を感度よく正確に行うことができる。

また、本実施形態によれば、虫歯検出方法を、1カ所から得られるデータを用いた測定方法、2カ所から得られるデータを対比する測定方法、光強度を変化させる測定方法の3つに大別できる、これらの方法を検出目的、

計測部位により使い分ける、組み合わせることを可能にすることにより、効率的に精度良く虫歯の有無や虫歯の進行度合を検出できる。

すなわち、1カ所から得られるデータを用いた測定方法にあっては、見えている部分のみならず歯の隙間や噛み合わせ等のような比較部位の得られにくい部位に用いることができ、その1箇所を測定するだけで、虫歯の有無や進行度合を検出できる。この測定方法は、得られた虫歯度合  $CD_1$  に基づいて虫歯の検出を瞬時に行える方法としてあらゆる部位の測定に有利である。

また、2カ所から得られるデータを対比する測定方法にあっては、見えている虫歯部位又は虫歯と疑われる部位について、健常部位との比較において、2箇所測定することにより、虫歯の有無や進行度合を検出できる。この測定方法は、虫歯部位と健常部位との比較を考慮に入れた虫歯度合  $CD_2$  のみに基づいて瞬時に虫歯の進行度合を検出できる点で有利である。

さらに、光強度変化測定方法にあっては、紫外線の光強度を変化させつつ、同一の虫歯部位について、少なくとも2回測定することにより、虫歯の進行度合を検出できる。この測定方法は、光強度の異なる輝度  $R_1$ 、 $R_2$  の大小を比較するだけで虫歯の有無を瞬時に判断できる点や、光強度の変化により歯の深度に応じた、虫歯の進行度合を得られる点で有利である。

本発明に係る虫歯検出方法は、虫歯検出プログラムを組み込んだ虫歯検出システム1を用いることにより、実現することができる。

本発明は、上記実施形態に限られることなく、種々の変更を行うことができる。

例えば、上記光強度測定方法においては、光強度を2種に変化させたが、これに限られず、光強度を3種以上に変化させ、このうち、任意の2つの情報(蛍光データ)を取り込み、虫歯度合  $CD_3$ ～ $CD_6$  を演算してもよい。

また、虫歯度合  $CD_3$ ～ $CD_6$  を演算するにあたって、光強度の異なる輝度の比 ( $R_1/R_2$ ) 等を用いたが、この代わりに、輝度の傾きや相関関係を用いることもできる。

さらに、虫歯度合  $CD$  と、下限しきい値  $E$  及び上限しきい値  $F$  との比較

のほか、さらに、別のしきい値を加えることにより、重度と軽度との中間的な程度の中等度を示すこともできる。さらにまた、表示装置 5 に解析データとして、健常歯である旨等のデータのほか、虫歯度合 C D 自体を表示してもよく、このような解析データを出力装置 1 3 に出力してもよい。

## 5 [実施例]

本発明者等は、現在のところ最も正確に虫歯の進行度合いを測定できる非特許文献 3 記載の方法と実施例 1 ~ 4 と比較例 1、2 との相関関係を求ることにより本発明に係る虫歯検出装置の検出精度を評価した。

実験に用いた抜去歯は、表層が脱落してなく非外科的処置で回復可能な 10 初期虫歯であるものを選んだ。これらの抜去歯は経験を積んだ歯科医師の目視により、ごく初期のもの（軽度）、ある程度進んだもの（中等度）、穴のあく寸前のもの（重度）の 3 種類に分類した。

分類した抜去歯をまず本発明に係わる虫歯検出装置で計測した。その後、非特許文献 3 に記載の方法に基づき、前記の抜去歯をスライスし、マイクロ X 線写真撮影用の試料を作成した。実施例において、本発明に係る虫歯検出装置での計測結果と非特許文献 3 で示した方法で得られたミネラル減少率との相関係数を求めることにより本発明の虫歯検出装置の正確さを検証した。

ミネラル減少率とは、虫歯の進行度合を示すもので、上記非特許文献 3 20 に従い、マイクロ X 線写真を用いて、表面から深さ 300 ミクロンまでの部位についてコンピュータ画像解析により得られた値であり、健常部位のミネラル減少率を 0 % とし、溶けて歯のすべてが無くなった場合はミネラル減少率を 100 % とする。

本実施例で用いた虫歯検出システム 1 及びこれを用いた虫歯検出方法について説明する。紫外線照射装置 2 として水銀ランプ（ニコン社製、形式： CSHG 1）を用いた。この水銀ランプは、400 nm 以下の波長の紫外線を透過するバンドパスフィルタ（ニコン社製、形式： E 365 / 10）の装着により、i 線を効率よく照射できるようにした。また、水銀ランプは、ND フィルタ（ニコン社製、形式： ND 4）の装着により、光強度を

$U_1$  ( $= 340 \text{ mV/cm}^2$ )、 $U_2$  ( $= 94 \text{ mV/cm}^2$ ) の 2 段階に変化できるようにした。水銀ランプからの紫外線は、光ファイバー（石英製）により直接歯に照射した。

5 蛍光受光装置 3 としてカラーCCDカメラ（ポラロイド社製、形式：P DMC II i）を用いた。カラーCCDは、400 nm 以上の光を透過する UVカットフィルタ（ニコン社製、形式：BA400）の装着により、可視光領域の蛍光を撮像できるようにした。データはA/D変換を行い各 16 bit の輝度 R、B、G を得た。

歯の測定部位及び光強度  $U_1$ 、 $U_2$  を変化させた測定について説明する。  
10 虫歯部位について、軽度部位 L、中等度部位 M、重度部位 H の 3箇所を測定の対象にすると共に、それぞれの近傍（同一歯の中）にある健常部位について、健常部位（軽） L'、健常部位（中） M'、健常部位（重） H' の 3箇所を測定の対象とした。

15 それぞれの測定部位について、光強度  $U_1$  と、光強度  $U_2$  とに対応して、測定部位の記号に添字「1」、「2」を付す。例えば、「L<sub>1</sub>」は、光強度  $U_1$  の紫外線を照射した、虫歯の軽度部位についての測定部位を示し、「H<sub>2,1</sub>」は、光強度  $U_1$ 、 $U_2$  の紫外線をそれぞれ照射した、虫歯の重度部位についての測定部位を示す。

本実施例において計測した、各測定部位毎の光強度  $U_1$ 、 $U_2$  と輝度 R、  
20 B、G との関係を図 10 に示し、光強度  $U_1$ 、 $U_2$ 、輝度 R、B、G のデータ（最大  $2^{16} = 65536$ ）を表 1、表 2、表 3 に示した。

表 1

測定部位		輝度 R	輝度 G	輝度 B
L <sub>1'</sub>	健常_340mV/cm <sup>2</sup>	2965	36420	64597
L <sub>2'</sub>	健常_94mV/cm <sup>2</sup>	3408	13465	34529
L <sub>1</sub>	軽度_340mV/cm <sup>2</sup>	6345	23169	46429
L <sub>2</sub>	軽度_94mV/cm <sup>2</sup>	4860	7892	16608

表 2

測定部位		輝度R	輝度G	輝度B
$M_1'$	健常_340mV/cm <sup>2</sup>	871	31447	61884
$M_2'$	健常_94mV/cm <sup>2</sup>	3561	12121	30485
$M_1$	軽度_340mV/cm <sup>2</sup>	9039	28355	51510
$M_2$	軽度_94mV/cm <sup>2</sup>	6432	11072	20589

表 3

測定部位		輝度R	輝度G	輝度B
$H_1'$	健常_340mV/cm <sup>2</sup>	284	40539	65279
$H_2'$	健常_94mV/cm <sup>2</sup>	2797	16054	41853
$H_1$	軽度_340mV/cm <sup>2</sup>	7571	16315	28406
$H_2$	軽度_94mV/cm <sup>2</sup>	6525	7385	11810

## [実施例 1]

実施例 1 では、上記実施形態で示した虫歯検出方法の「1カ所から得られるデータを用いた測定方法」に従い、光強度  $U_1$  の測定部位  $L_1$ 、 $M_1$ 、 $H_1$ 、 $L_1'$ 、 $M_1'$ 、 $H_1'$  について、それぞれ、虫歯度合  $CD_1$  を算出し、虫歯度合  $CD_1$  とミネラル減少率とのそれぞれの相関係数を求めた。

## [比較例 1]

比較例 1 では、上記特許文献 2 に記載の技術に従い、紫外線の光強度を  $U_1$  にし、測定部位  $L_1$ 、 $M_1$ 、 $H_1$ 、 $L_1'$ 、 $M_1'$ 、 $H_1'$  について計測した。カラー CCD に、620 nm 以上の光を透過するカットフィルタを装着し、カラー CCD が赤色蛍光のみの画像を取り込めるようにした。この画像をグレー画像に変換し、各測定部位毎に赤の輝度 (16 bit) を得た。赤の輝度とミネラル減少率とのそれぞれの相関係数を求めた。実施例 1 と比較例 1 の計測結果を表 4 に示す。

表 4

			実施例1(絶対値)	比較例1
測定部位	ミネラル減少率(%)	虫歯度合CD <sub>1</sub>	赤の輝度	
L <sub>1</sub>	虫歯部位(軽度)	11.2	0.137	6345
M <sub>1</sub>	虫歯部位(中等度)	25.6	0.166	9039
H <sub>1</sub>	虫歯部位(重度)	68.9	0.267	7571
L <sub>1</sub> '	健常部位	0	0.046	2965
M <sub>1</sub> '	健常部位	0	0.014	871
H <sub>1</sub> '	健常部位	0	0.004	284
ミネラル減少率との相関係数		0.934	0.702	

表 4 に示したように、ミネラル減少率が高い場合は虫歯が進行していることを意味している。本発明に係る実施例 1 の虫歯度合 CD<sub>1</sub> とミネラル減少率との相関係数が高く、虫歯度合 CD<sub>1</sub> は、虫歯の進行度合を客観的に定量値することができる事が実証された。

虫歯の進行度合いを的確に捉えるためには、ミネラル減少率の値に応じて、赤の輝度も高くならなければならない。しかし、これに対し比較例 1 の場合は、虫歯の中等度部位 M<sub>1</sub> と重度部位 H<sub>1</sub> の間で、赤の輝度の大小関係が逆転しており、必ずしも虫歯の進行度合とは一致していないため、虫歯の進行度合いの検出は困難である。

#### [実施例 2]

実施例 2 では、上記実施形態で示した虫歯検出方法の「対比測定方法」に従い、光強度 U<sub>1</sub> の測定部位 (L<sub>1</sub>、L<sub>1</sub>')、(M<sub>1</sub>、M<sub>1</sub>')、(H<sub>1</sub>、

$H_1'$  )について、それぞれ、虫歯度合  $CD_2$ を算出し、虫歯度合  $CD_2$ とミネラル減少率とのそれぞれの相関係数を求めた。

[比較例 2]

比較例 2では、上記特許文献 1で示した従来技術に従い、紫外線の光強度を  $U_1$ にし、測定部位 ( $L_1, L_1'$ )、( $M_1, M_1'$ )、( $H_1, H_1'$ )について計測した。カラーCCDに、520 nm以上 の光を透過するカットフィルタを装着し、カラーCCDが 520～800 nmの単色光の画像を取り込めるようにした。この画像をグレー画像に変換し、各測定部位毎に、虫歯部位の輝度 (16 bit)と、健常部位の輝度 (16 bit)と 10 を求め、その比を相対輝度として算出した。相対輝度とミネラル減少率とのそれぞれの相関係数を求めた。実施例 2と比較例 2の計測結果を表 5に示す。

表 5

		実施例 2 (相対比較)	比較例 2
ミネラル減少率 (%)		虫歯度合 $CD_2$	相対輝度
$L_1, L_1'$	軽度部位	11.2	6.14E+07
$M_1, M_1'$	中等度部位	25.6	8.47E+07
$H_1, H_1'$	重度部位	68.9	2.69E+08
ミネラル減少率との相関係数		0.990	-0.742

15

表 5 から、虫歯度合  $CD_2$ とミネラル減少率との相関係数が高く、虫歯度合  $CD_2$ は、虫歯の進行度合について客観的な定量値で示すことができる 20 ことが実証された。その一方、虫歯の中等度部位 ( $M_1, M_1'$ )と重度部位 ( $H_1, H_1'$ )の間で、相対輝度の大小関係が逆転しており、単色光の輝度のみでは、必ずしも虫歯の進行度合とは一致していないため、虫歯

の進行度合いの検出は困難である。

[実施例 3]

実施例 3 では、上記実施形態で示した虫歯検出方法の「光強度変化測定方法」に従い、光強度  $U_1$ 、 $U_2$  の測定部位  $L_{2,1}$ 、 $M_{2,1}$ 、 $H_{2,1}$ 、 $L_{2,1}'$ 、 $M_{2,1}'$ 、 $H_{2,1}'$  について、それぞれ、輝度変化 ( $R_1 - R_2$ )、( $G_1 - G_2$ )、( $B_1 - B_2$ ) と、虫歯度合  $CD_3$ 、 $CD_4$  とを演算し、虫歯度合  $CD_3$ 、 $CD_4$  とミネラル減少率とのそれぞれの相関係数を求めた。実施例 3 の計測結果を表 6、表 7 に示す。

10 表 6

測定部位	虫歯部位 (軽度)	ミネラル 減少率 (%)	輝度変化 (340 - 94)		
			$R_1 - R_2$	$G_1 - G_2$	$B_1 - B_2$
$L_{2,1}$	虫歯部位 (軽度)	11.2	1485	15277	27821
$M_{2,1}$	虫歯部位 (中等度)	25.6	2607	17283	30921
$H_{2,1}$	虫歯部位 (重度)	68.9	1046	8931	16596
$L_{2,1}'$	健常部位	0	-443	22955	30068
$M_{2,1}'$	健常部位	0	-2690	19326	31399
$H_{2,1}'$	健常部位	0	-2514	24485	23426
ミネラル減少率との相関係数		0.557	-0.890	-0.739	

表 7

		実施例 3 (強度変化)		
測定部位		ミネラル減少率 (%)	虫歯度合 CD <sub>3</sub>	虫歯度合 CD <sub>4</sub>
L <sub>2,1</sub>	軽度部位	11.2	3.649	3.833
M <sub>2,1</sub>	中等度部位	25.6	3.516	3.599
H <sub>2,1</sub>	重度部位	68.9	2.791	2.564
ミネラル減少率との相関係数		-0.995	-0.998	

表 6 から、輝度変化 (R<sub>1</sub> - R<sub>2</sub>) の符号は、虫歯の有無を示す客観的な判断基準であることが明らかになった。また、表 7 から、虫歯度合 CD<sub>3</sub>、CD<sub>4</sub> とミネラル減少率との相関係数が高く、虫歯度合 CD<sub>3</sub>、CD<sub>4</sub> は、  
5 虫歯の進行度合について客観的な定量値で示すことができる事が実証された。

#### [実施例 4]

実施例 4 では、上記実施例 3 と同様に、虫歯度合 CD<sub>5</sub>、CD<sub>6</sub> とを演算し、虫歯度合 CD<sub>5</sub>、CD<sub>6</sub> とミネラル減少率とのそれぞれの相関係数を求  
10 めた。

上記虫歯度合 CD<sub>3</sub>、CD<sub>4</sub> が、輝度 R と、輝度 B、G の何れか一方との二者を演算対象にしているのに対し、虫歯度合 CD<sub>5</sub>、CD<sub>6</sub> は、輝度 R、B、G の三者を演算対象にしている点が異なる。実施例 4 の計測結果を表 8 に示す。

表 8

測定部位		ミネラル減少率 (%)	実施例4(強度変化)	
			虫歯度合 CD <sub>5</sub>	虫歯度 合 CD <sub>6</sub>
L <sub>2,1</sub>	軽度部位	11.2	7.48	10.71
M <sub>2,1</sub>	中等度部位	25.6	7.11	9.00
H <sub>2,1</sub>	重度部位	68.9	5.35	6.17
ミネラル減少率との相関係数			-0.997	-0.990

表 8 から、虫歯度合 CD<sub>5</sub>、CD<sub>6</sub> とミネラル減少率との相関係数が高く、虫歯度合 CD<sub>5</sub>、CD<sub>6</sub> は、虫歯の進行度合について客観的な定量値で示すことができる事が実証された。

本発明によれば、初期虫歯を感度良く正確に検出し、しかもその進行度合をも検出できる虫歯検出装置及び虫歯検出方法を得ることができる。

#### 産業上の利用の可能性

10 本発明は、非破壊的に初期虫歯を検出する技術分野において、初期虫歯の有無、初期虫歯の進行度合を検出する技術に利用できる。

## 請 求 の 範 囲

1. 紫外線光源と、該紫外線光源から照射された紫外線により歯からの蛍光を受光する蛍光受光部と、該蛍光受光部から送信された蛍光データを5 解析する蛍光データ解析部と、該蛍光データ解析部により解析されたデータを表示するデータ表示部とを備えた虫歯検出装置であって、

前記蛍光データ解析部は、前記蛍光データを可視光領域の2以上の波長帯における蛍光強度に基づいて解析をする虫歯検出装置。

2. 紫外線光源と、該紫外線光源から照射された紫外線により歯からの10 蛍光を受光する蛍光受光部と、該蛍光受光部から送信された蛍光データを解析する蛍光データ解析部と、該蛍光データ解析部により解析されたデータを表示するデータ表示部とを備えた虫歯検出装置であって、

前記蛍光データ解析部は、前記紫外線の照射光強度の変化に応じて変化する1つ以上の波長帯における複数の蛍光強度に基づいて解析をする虫歯15 検出装置。

3. 前記蛍光データ解析部は、550～810nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上260nm以下の波長幅を有する第1波長帯における前記蛍光強度と、380～550nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上170nm以下の波長幅を有する第2波長帯における前記蛍光強度とに基づいて虫歯の進行度合を演算する請求の範囲第1項又は第2項に記載の虫歯検出装置。

4. 前記蛍光データ解析部は、550～810nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上260nm以下の波長幅を有する第1波長帯における前記蛍光強度と、380～550nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上170nm以下の波長幅を有する第2波長帯における前記蛍光強度及び/25 又は450～650nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上200nm以下の波長幅を有する第3波長帯における前記蛍光強度とに基づいて虫歯の進行度合を演算する請求の範囲第1項又は第2項に記載の虫歯検出装置。

5. 前記蛍光受光部には、前記可視光領域から前記第1波長帯及び前記第2及び／又は第3波長帯における前記蛍光強度に関する情報を抽出可能な光デバイスが設けられている請求の範囲第1項～第4項記載の何れかに記載の虫歯検出装置。

5 6. 前記光デバイスは、分光輝度計、カラーCCD、CMOS、又は2色以上の色フィルタ付き光センサの何れか一つである請求の範囲第5項に記載の虫歯検出装置。

7. 前記紫外線光源は、出力強度が調整可能に構成されている請求の範囲第5項又は第6項記に記載の虫歯検出装置。

10 8. 前記紫外線光源は、紫外線LEDである請求の範囲第7項に記載の虫歯検出装置。

9. 光源から紫外線を歯の測定部位に照射し、該測定部位からの蛍光によって虫歯を検出する方法であって、  
 前記測定部位からの蛍光情報を取り込む第1ステップと、  
 15 前記取り込んだ蛍光情報を550～810nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上260nm以下の波長幅を有する第1波長帯、380～550nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上170nm以下の波長幅を有する第2波長帯及び450～650nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上200nm以下の波長幅を有する第3波長帯から選ばれる2つ以上の波長帯における前記蛍光の強度を求める第2ステップと、  
 20 前記蛍光の強度に基づいて演算し、前記演算結果に応じて虫歯の有無及び／又は虫歯の進行度合を判断する第3ステップとを含む虫歯検出方法。

10. 前記第3ステップには、前記第1波長帯の蛍光の強度Rと、前記第2波長帯の蛍光の強度B又は前記第3波長帯の蛍光の強度Gとを対象とし、次の式(1)あるいは(2)に従って虫歯度合CD<sub>1</sub>を演算する第3.1ステップと、  
 25  $CD_1 = R / B \quad \cdots \text{式 (1)}$  あるいは  
 $CD_1 = R / G \quad \cdots \text{式 (2)}$   
 前記虫歯度合CD<sub>1</sub>の値と下限しきい値E<sub>1</sub>とを比較する第3.2ステッ

プと、

前記虫歯度合  $CD_1$  の値が、前記下限しきい値  $E_1$  より大きい場合には虫歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_1$  の値が、前記下限しきい値  $E_1$  より小さい又は前記下限しきい値  $E_1$  と等しい場合には健常な歯であると判断する第 3.3 ステップとを含む請求の範囲第 9 項に記載の虫歯検出方法。

11. 前記第 3.3 ステップに虫歯であると判断された場合において、前記虫歯度合  $CD_1$  の値と上限しきい値  $F_1$  とを比較する第 3.4 ステップと、

前記虫歯度合  $CD_1$  の値が、前記上限しきい値  $F_1$  より大きい場合には重度の虫歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_1$  の値が、前記上限しきい値  $F_1$  より小さい又は前記上限しきい値  $F_1$  と等しい場合には軽度の虫歯であると判断する第 3.5 ステップとを含む請求の範囲第 10 項に記載の虫歯検出方法。

12. 光源から紫外線を歯の測定部位に照射し、該測定部位からの蛍光によって虫歯を検出する方法であって、

前記測定部位の数が 2 つの場合には、前記測定部位の蛍光をそれぞれ第 1 情報及び第 2 情報として取り込む第 1 ステップと、

前記第 1、第 2 情報に基づきそれぞれ、550～810 nm の波長帯から選ばれる 0.1 nm 以上 260 nm 以下の波長幅を有する第 1 波長帯、20 380～550 nm の波長帯から選ばれる 0.1 nm 以上 170 nm 以下の波長幅を有する第 2 波長帯及び 450～650 nm の波長帯から選ばれる 0.1 nm 以上 200 nm 以下の波長幅を有する第 3 波長帯から選ばれる 2 以上の波長帯における前記蛍光の強度を求める第 2 ステップと、

前記蛍光強度に基づき、次の式 (3) あるいは (4) に従って虫歯度合  $CD_2$  を演算する第 3 ステップと、

$$CD_2 = |R_n - R_c| \times |B_n - B_c| \quad \cdots \text{式 (3)} \quad \text{あるいは}$$

$$CD_2 = |R_n - R_c| \times |G_n - G_c| \quad \cdots \text{式 (4)}$$

$R_n$  — 第 1 情報の第 1 波長帯の蛍光の強度

$B_n$  — 第 1 情報の第 2 波長帯の蛍光の強度

$G_n$  一 第1情報の第3波長帯の蛍光の強度

$R_c$  一 第2情報の第1波長帯の蛍光の強度

$B_c$  一 第2情報の第2波長帯の蛍光の強度

$G_c$  一 第2情報の第3波長帯の蛍光の強度

5 前記虫歯度合  $CD_2$  の値と下限しきい値  $E_2$  とを比較する第4ステップと、

前記虫歯度合  $CD_2$  の値が、前記下限しきい値  $E_2$  より大きい場合には虫歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_2$  の値が、前記下限しきい値  $E_2$  より小さい又は前記下限しきい値  $E_2$  と等しい場合には健常な歯であると判断  
10 する第5ステップとを含む虫歯検出方法。

13. 前記第5ステップに虫歯であると判断された場合において、前記虫歯度合  $CD_2$  の値と上限しきい値  $F_2$  とを比較する第5.1ステップと、

前記虫歯度合  $CD_2$  の値が、前記上限しきい値  $F_2$  より大きい場合には重度の虫歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_2$  の値が、前記上限しきい値  $F_2$  より小さい又は前記上限しきい値  $F_2$  と等しい場合には軽度の虫歯であると判断する第5.2ステップとを含む請求の範囲第12項に記載の虫歯検出方法。

14. 光源から紫外線を歯の測定部位に照射し、該測定部位からの蛍光によって虫歯を検出する方法であって、

20 異なる2以上の光強度  $U_1$ 、 $U_2$ … $U_n$  ( $U_1 > U_2 > \dots > U_n$ ) につき前記測定部位の蛍光をそれぞれ第1情報、第2情報…第n情報として取り込む第1ステップと、

第1情報、第2情報…第n情報を、550～810nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上260nm以下の波長幅を有する第1波長帯、380～550nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上170nm以下の波長幅を有する第2波長帯及び450～650nmの波長帯から選ばれる0.1nm以上200nm以下の波長幅を有する第3波長帯から選ばれる2以上の波長帯における前記蛍光の第1蛍光強度  $R_1$ 、 $B_1$ 、 $G_1$  及び第2蛍光強度  $R_2$ 、 $B_2$ 、 $G_2$ …第n蛍光強度  $R_n$ 、 $B_n$ 、 $G_n$  を求める第2ステ

ップと、

下記の式(5)に従い演算する第3ステップと、

$$(R_1 - R_2) + (R_2 - R_3) + \cdots + (R_{n-1} - R_n) \cdots \text{式(5)}$$

式(5)から得られる結果の符号が正であれば虫歯の可能性があると判

5 判断し、負もしくは0であれば健常な歯であると判断する第4ステップを含む虫歯検出方法。

15. 前記第4ステップに虫歯の可能性があると判断された場合において、次の式(6)に従って虫歯度合 $CD_3$ を演算する第4.1ステップと、

$$CD_3 = (R_{n-1}/R_n) \times (B_{n-1}/B_n) \cdots \text{式(6)}$$

10 前記虫歯度合 $CD_3$ の値と上限しきい値 $F_3$ とを比較する第4.2ステップと、

前記虫歯度合 $CD_3$ の値が、前記上限しきい値 $F_3$ より大きい又は前記上限しきい値 $F_3$ と等しい場合には健常な歯であると判断し、前記虫歯度合 $CD_3$ の値が、前記上限しきい値 $F_3$ より小さい場合には虫歯であると判断

15. 前記第4.3ステップとを含む請求の範囲第14項に記載の虫歯検出方法。

16. 前記第4.3ステップに虫歯であると判断された場合において、前記虫歯度合 $CD_3$ の値と下限しきい値 $E_3$ とを比較する第4.4ステップと、

前記虫歯度合 $CD_3$ の値が、前記下限しきい値 $E_3$ より大きい又は前記下限しきい値 $E_3$ と等しい場合には軽度の虫歯であると判断し、前記虫歯度合 $CD_3$ の値が、前記下限しきい値 $E_3$ より小さい場合には重度の虫歯であると判断する第4.5ステップとを含む請求の範囲第15項に記載の虫歯検出方法。

17. 前記第4ステップに虫歯の可能性があると判断された場合において、次の式(7)に従って虫歯度合 $CD_4$ を演算する第4.1ステップと、

$$CD_4 = (R_{n-1}/R_n) \times (G_{n-1}/G_n) \cdots \text{式(7)}$$

前記虫歯度合 $CD_4$ 値と上限しきい値 $F_4$ とを比較する第4.2ステップと、

前記虫歯度合 $CD_4$ の値が、前記上限しきい値 $F_4$ より大きい又は前記上

限しきい値  $F_4$  と等しい場合には健常な歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_4$  の値が、前記上限しきい値  $F_4$  より小さい場合には虫歯であると判断する第 4.3 ステップとを含む請求の範囲第 14 項に記載の虫歯検出方法。

18. 前記第 4.3 ステップに虫歯であると判断された場合において、

5 前記虫歯度合  $CD_4$  の値と下限しきい値  $E_4$  とを比較する第 4.4 ステップと、

前記虫歯度合  $CD_4$  の値が、前記下限しきい値  $E_4$  より大きい又は前記下限しきい値  $E_4$  と等しい場合には軽度の虫歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_4$  の値が、前記下限しきい値  $E_4$  より小さい場合には重度の虫歯であると判断する第 4.5 ステップとを含む請求の範囲第 17 項に記載の虫歯検出方法。

19. 前記第 4 ステップに虫歯の可能性があると判断された場合において、次の式(8)に従って虫歯度合  $CD_4$  を演算する第 4.1 ステップと、

$$CD_5 = (R_{n-1}/R_n) \times \{ (G_{n-1}/G_n) + (B_{n-1}/B_n) \} \quad \dots$$

15 式(8)

前記虫歯度合  $CD_5$  値と上限しきい値  $F_5$  とを比較する第 4.2 ステップと、

前記虫歯度合  $CD_5$  の値が、前記上限しきい値  $F_5$  より大きい又は前記上限しきい値  $F_5$  に等しい場合には健常の歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_5$  の値が、前記上限しきい値  $F_5$  より小さい場合には虫歯であると判断する第 4.3 ステップとを含む請求の範囲第 14 項に記載の虫歯検出方法。

20. 前記第 4.3 ステップに虫歯であると判断された場合において、前記虫歯度合  $CD_5$  の値と下限しきい値  $E_5$  とを比較する第 4.4 ステップと、

25 前記虫歯度合  $CD_5$  の値が、前記下限しきい値  $E_5$  より大きい又は前記下限しきい値  $E_5$  に等しい場合には軽度の虫歯であると判断し、前記虫歯度合  $CD_5$  の値が、前記下限しきい値  $E_5$  より小さい場合には重度の虫歯であると判断する第 4.5 ステップとを含む請求の範囲第 19 に記載の虫歯検出方法。

21. 前記  $n$  が 2 である請求の範囲第 14 項～第 20 項の何れか一つに記載の虫歯検出方法。

22. 請求の範囲第 9 項～第 20 項の何れか一つに記載の虫歯検出方法をコンピュータに実現させる虫歯検出プログラム。

5 23. 光源から紫外線を歯の測定部位に照射し、該測定部位からの蛍光によって虫歯を検出する方法であつて、

異なる 2 以上の光強度  $U_1$ 、 $U_2 \cdots U_n$  ( $U_1 > U_2 \cdots \cdots > U_n$ ) につき前記測定部位の蛍光をそれぞれ第 1 情報、第 2 情報…第  $n$  情報として取り込む第 1 ステップと、

10 第 1 情報、第 2 情報…第  $n$  情報を、550～810 nm の波長帯から選ばれる 0.1 nm 以上 260 nm 以下の波長幅を有する第 1 波長帯における前記蛍光の第 1 蛍光強度  $R_1$  及び第 2 蛍光強度  $R_2 \cdots \cdots$  第  $n$  蛍光強度  $R_n$  を求める第 2 ステップと、

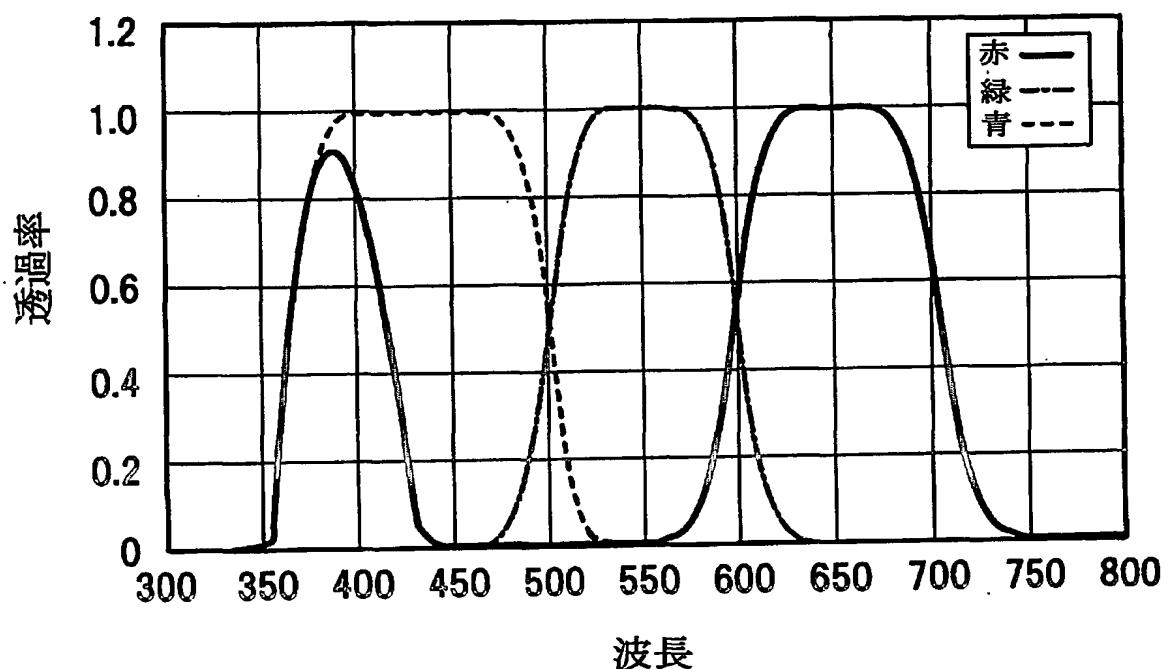
下記の式 (5) に従い演算する第 3 ステップと、

15 
$$(R_1 - R_2) + (R_2 - R_3) + \cdots + (R_{n-1} - R_n) \cdots \text{式 (5)}$$

式 (5) から得られる結果の符号が正であれば虫歯の可能性があると判断し、負もしくは 0 であれば健常な歯であると判断する第 4 ステップを含む虫歯検出方法。

1/12

Fig.1



2/12

Fig.2

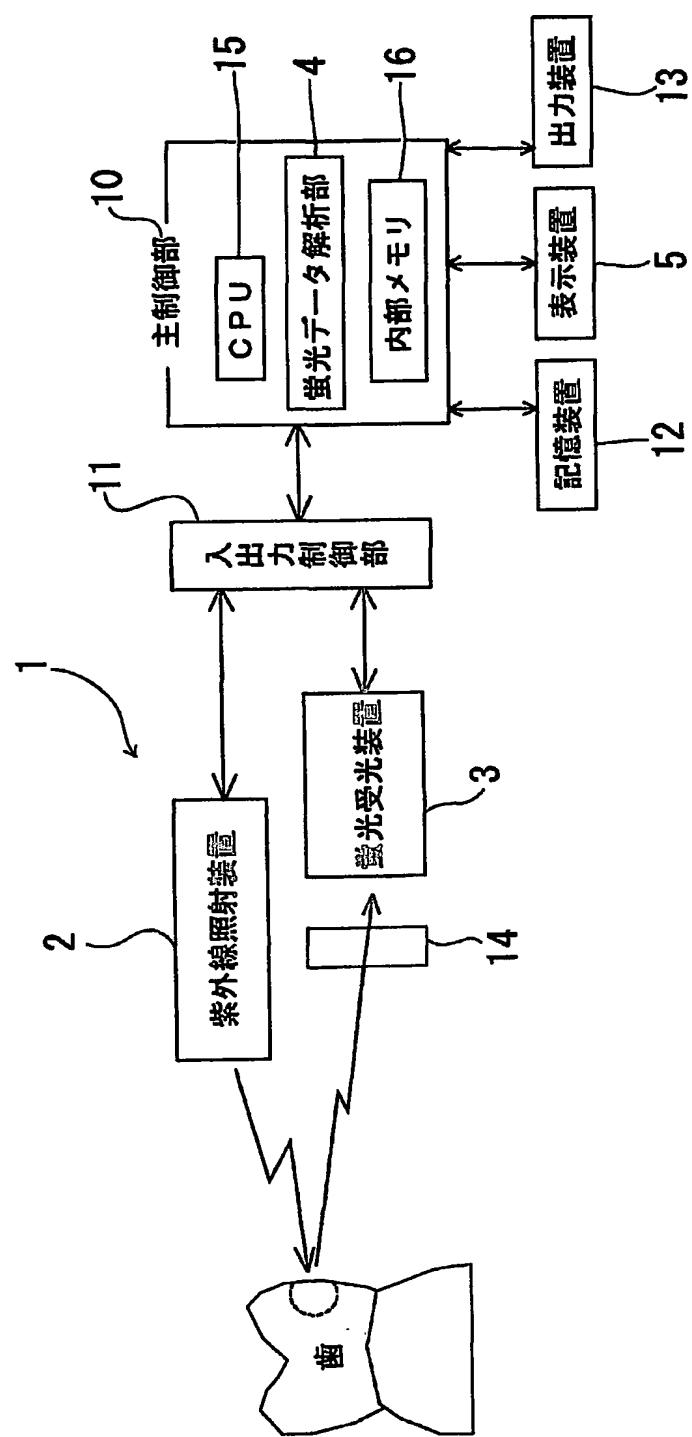


Fig.3

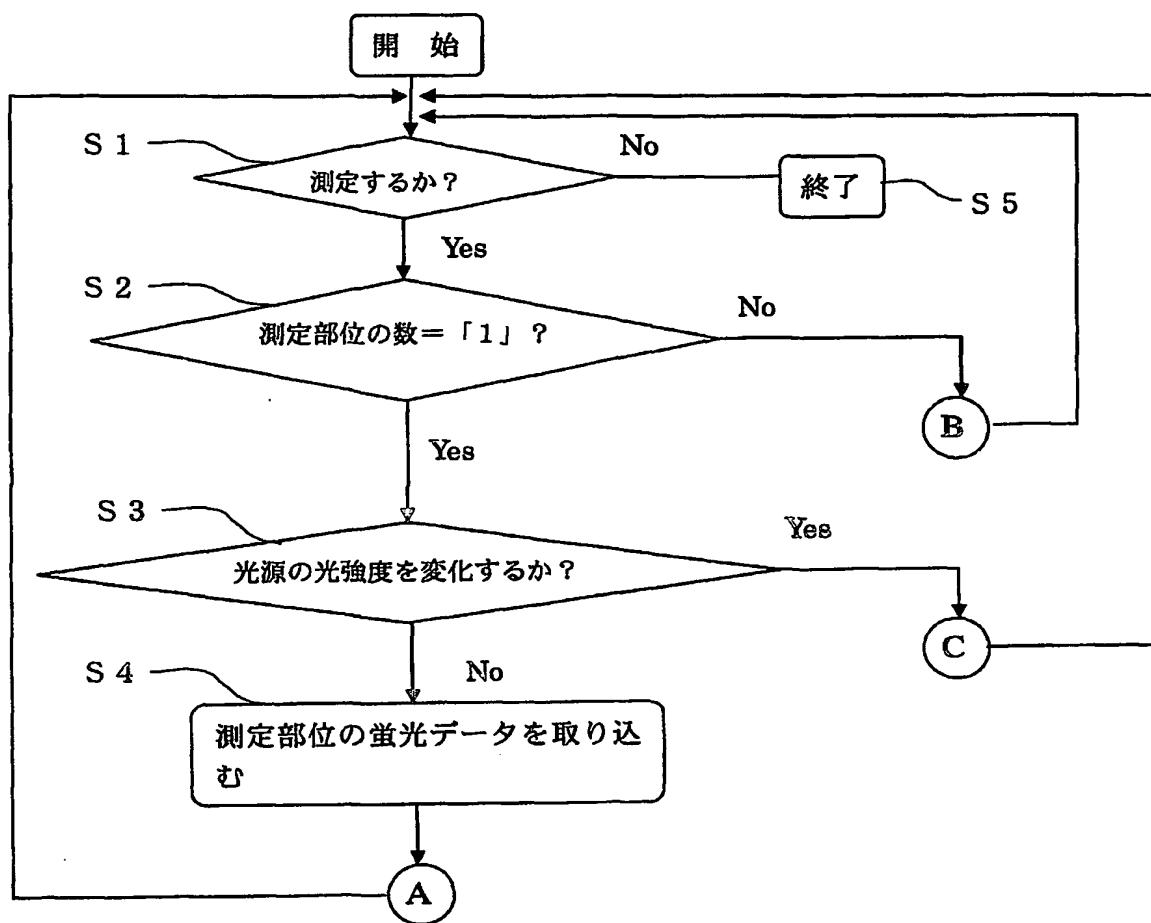


Fig.4

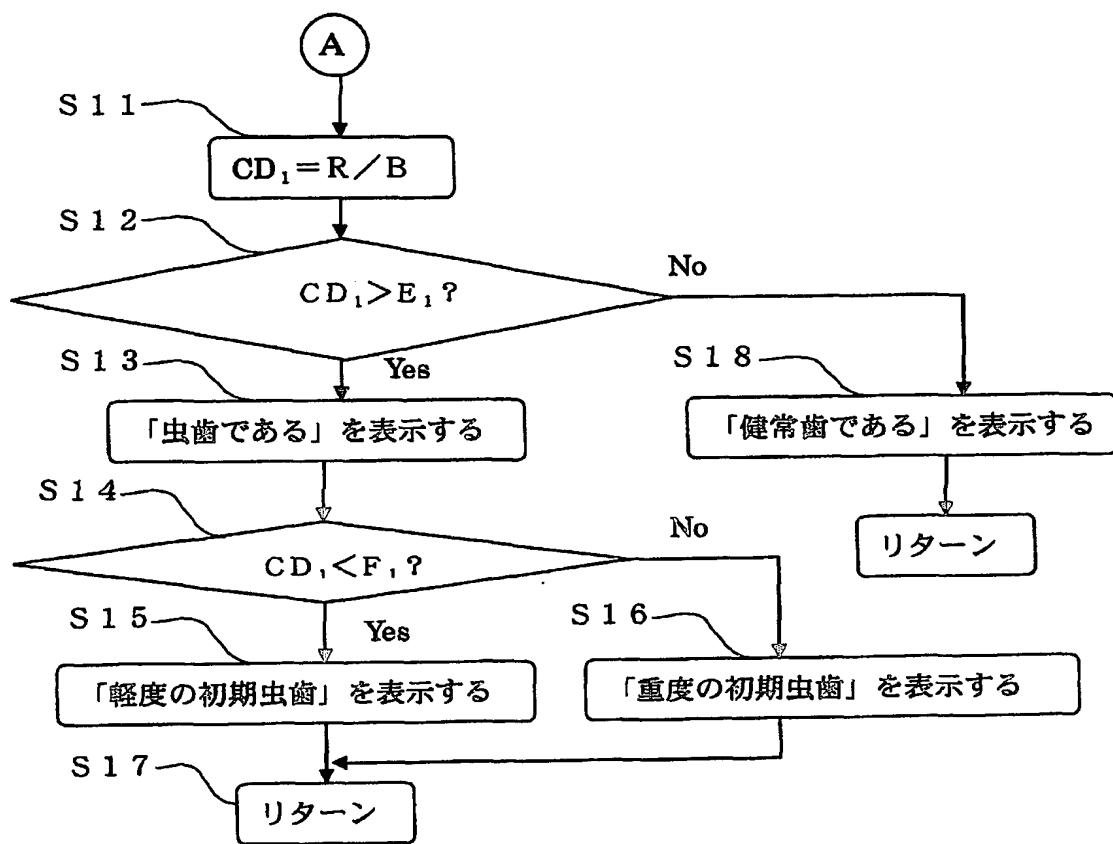


Fig.5

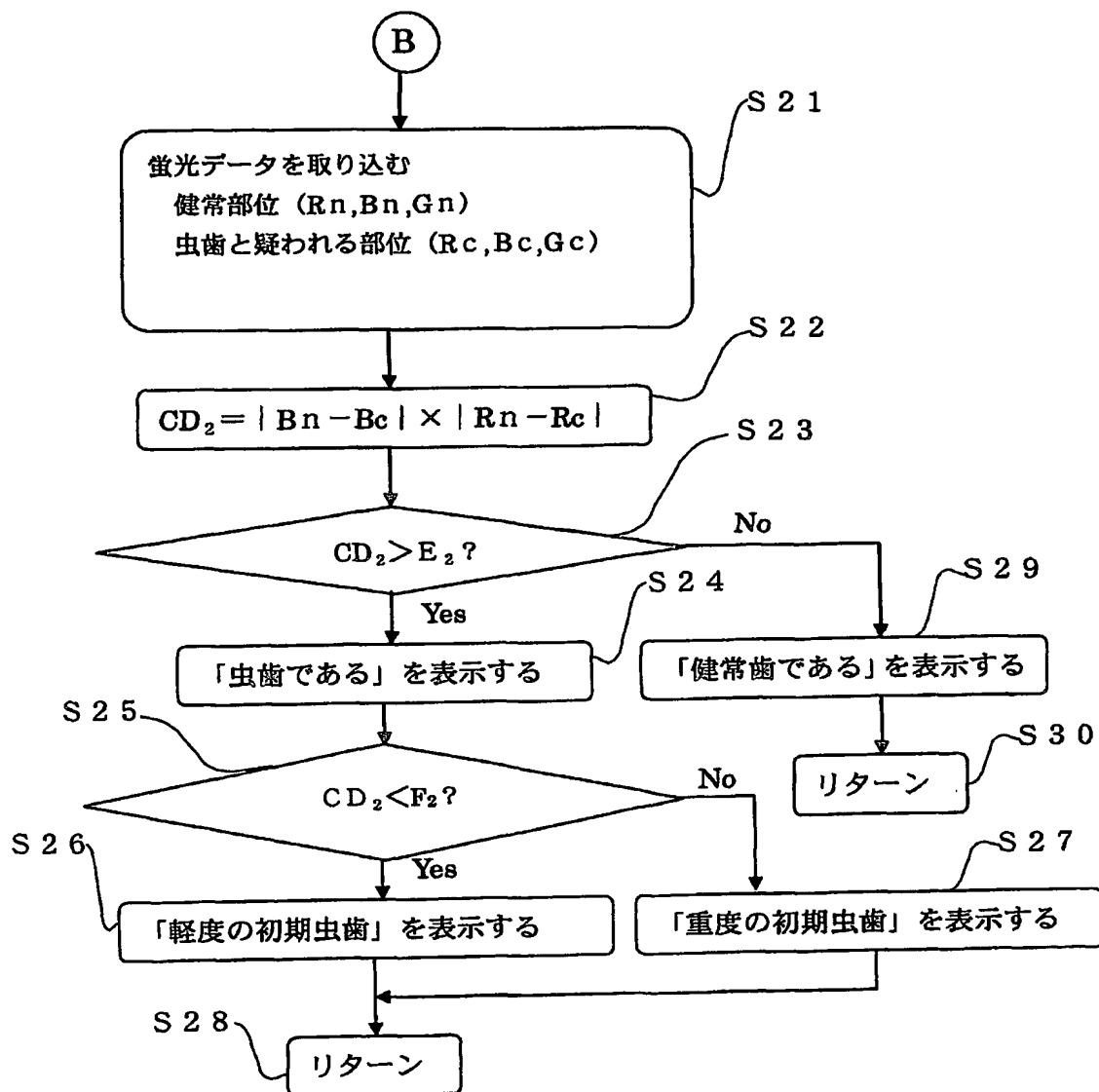


Fig.6

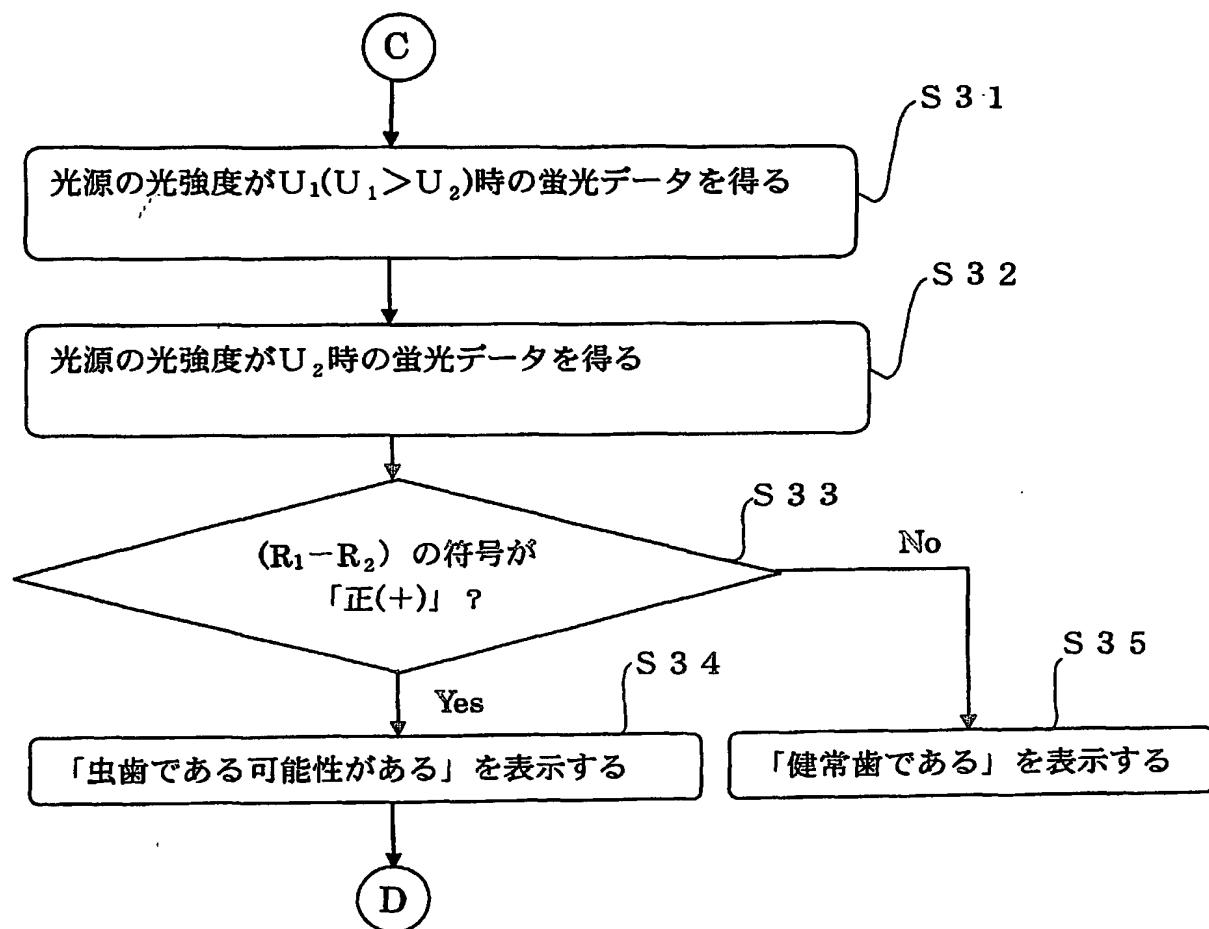


Fig.7

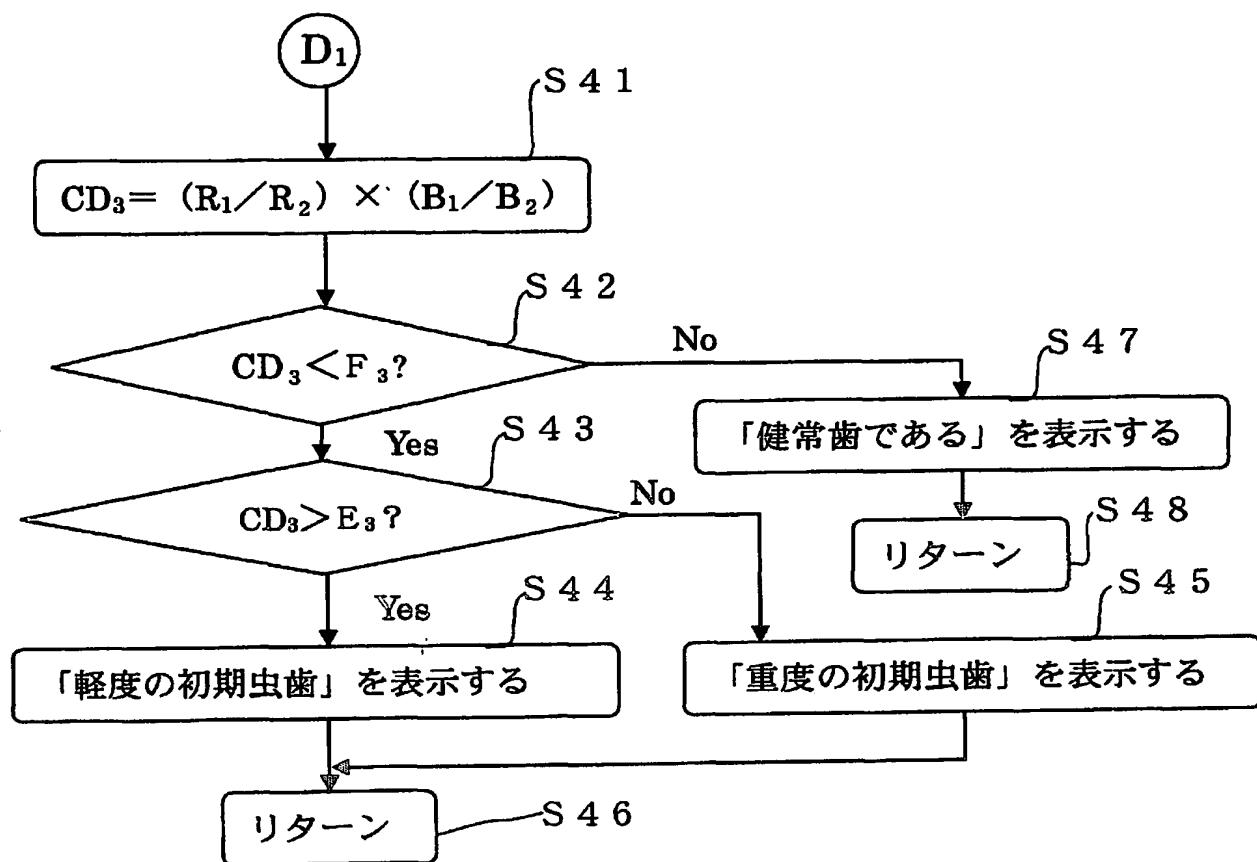


Fig.8

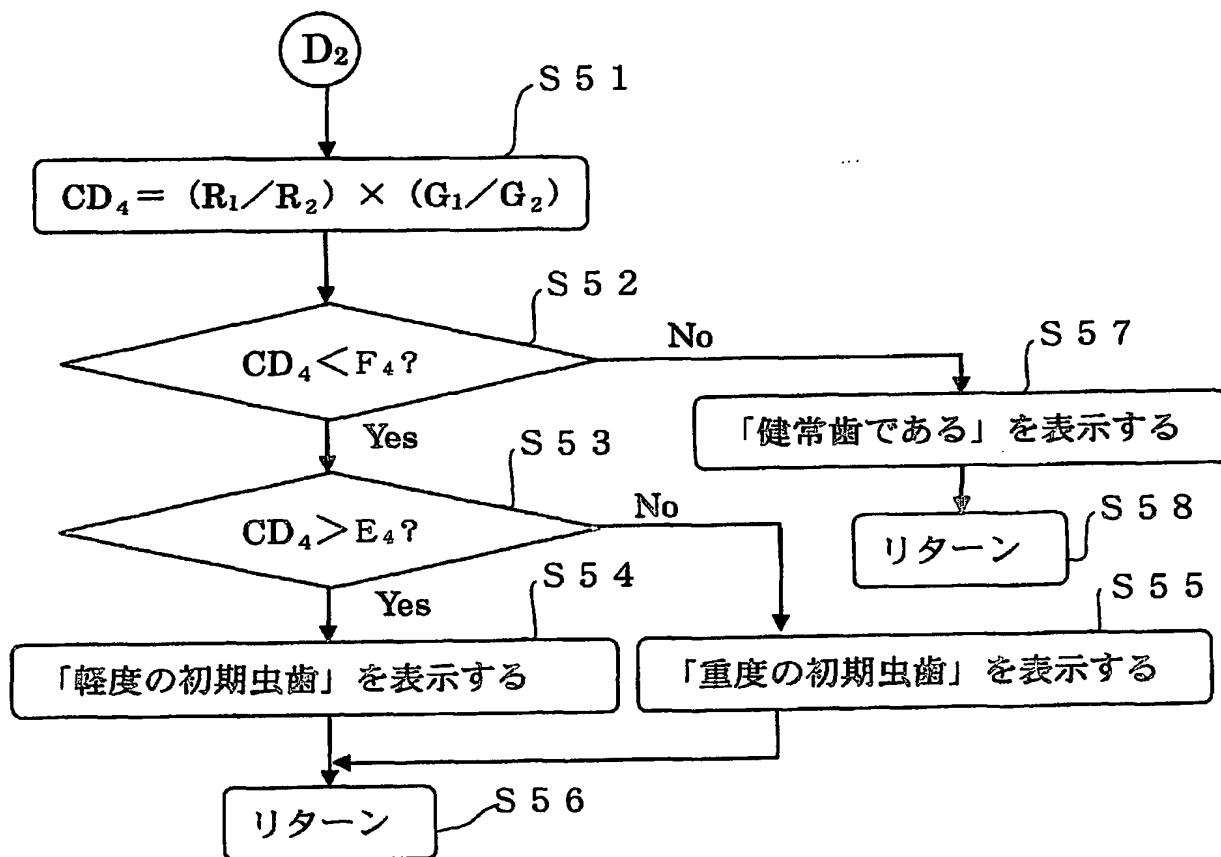
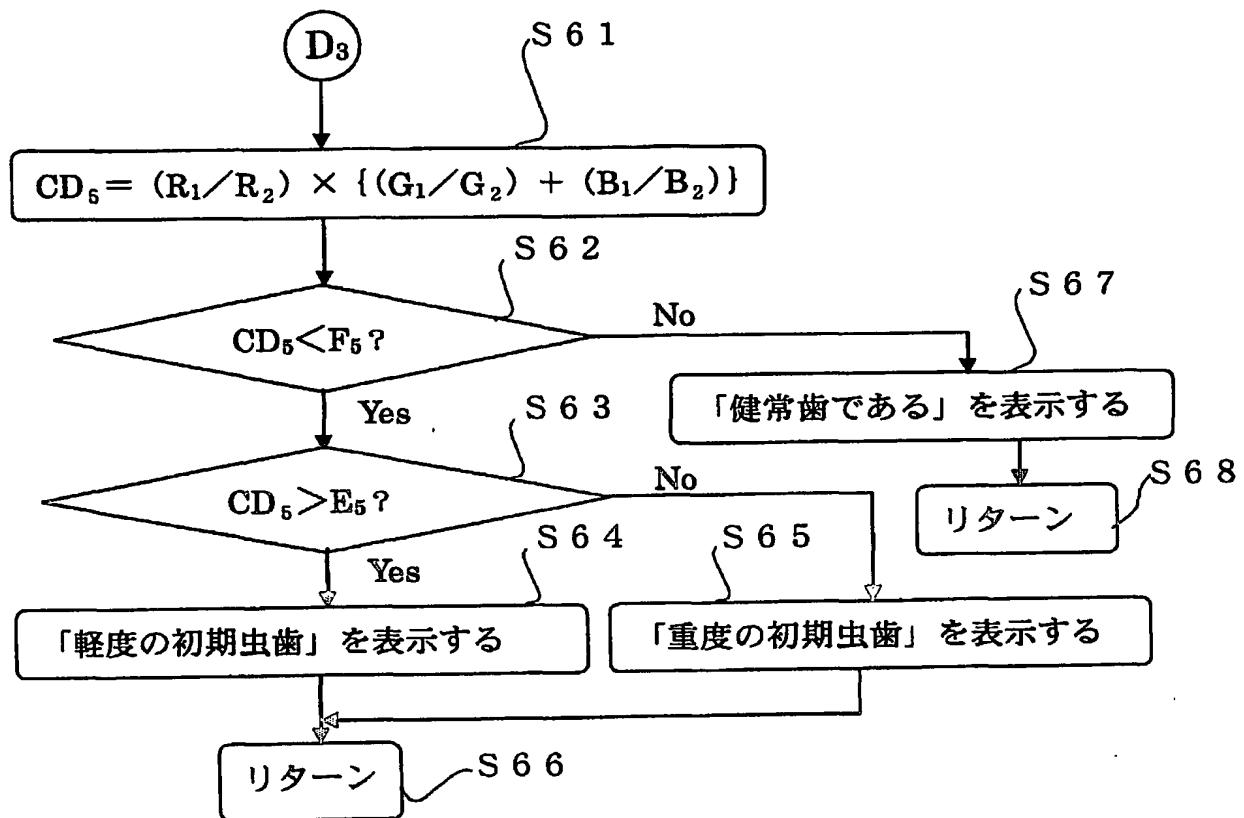


Fig.9



10/12

Fig.10(a)

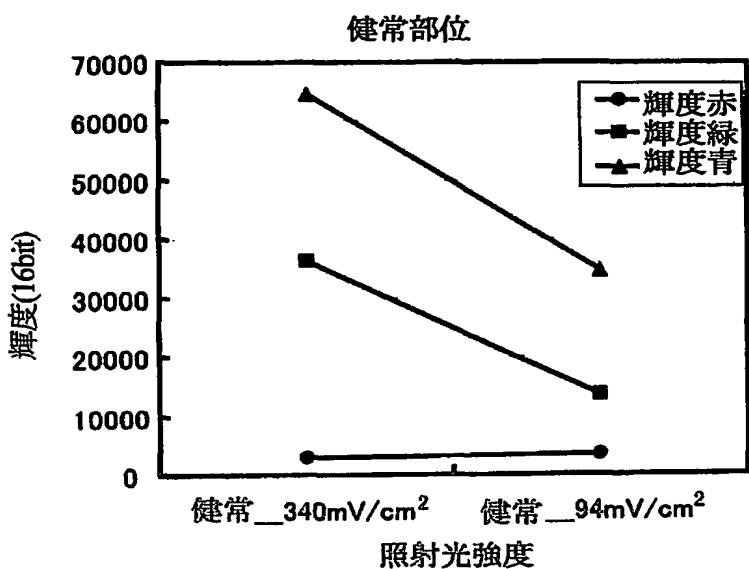
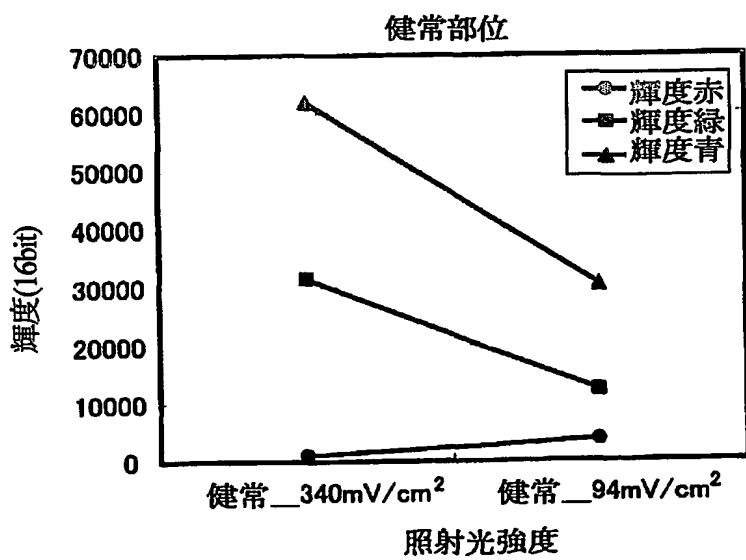


Fig.10(b)



11/12

Fig.10(c)

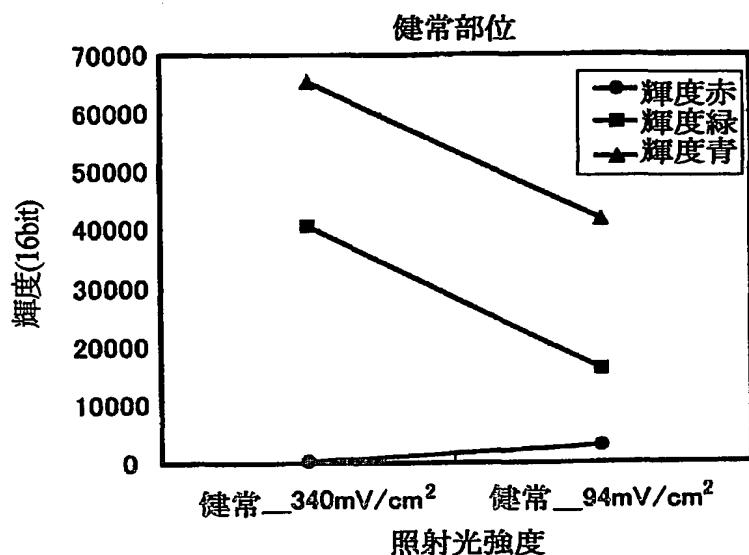
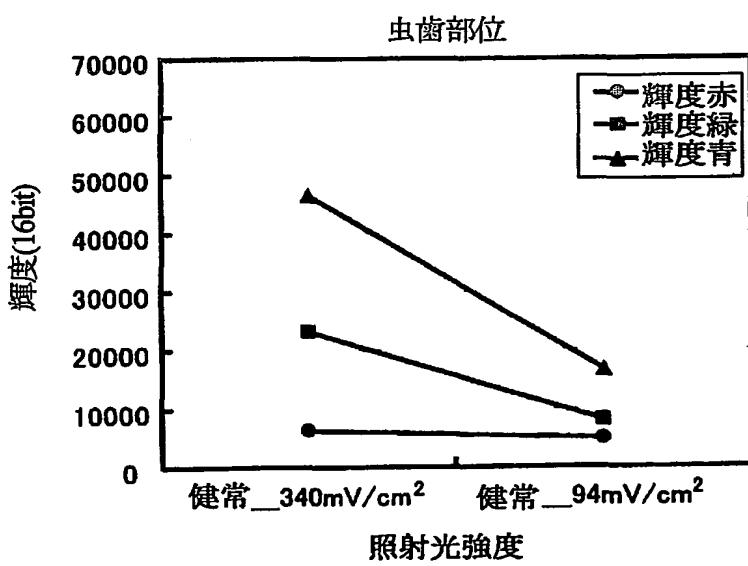


Fig.10(d)



12/12

Fig.10(e)

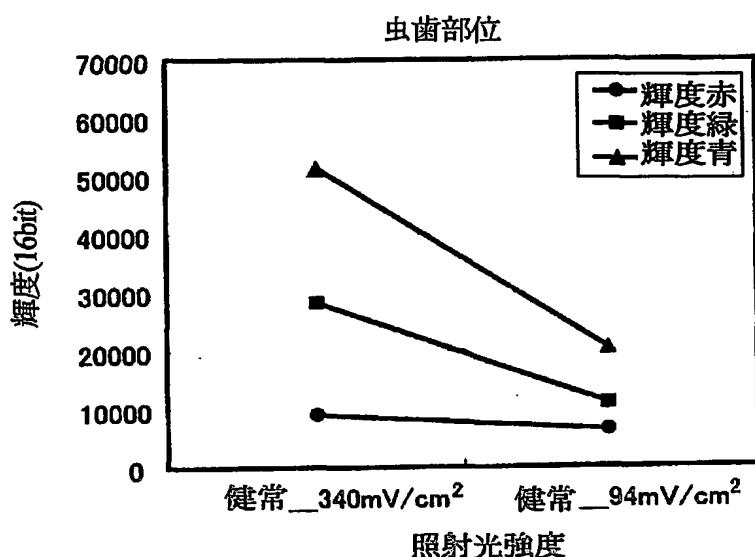
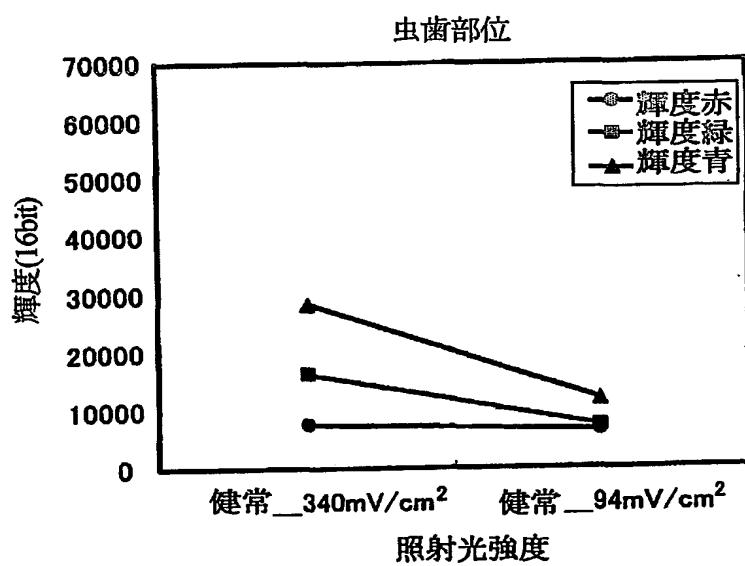


Fig.10(f)



## INTERNATIONAL SEARCH REPORT

International application No.

PCT/JP2004/004861

## A. CLASSIFICATION OF SUBJECT MATTER

Int.C1<sup>7</sup> A61B1/24

According to International Patent Classification (IPC) or to both national classification and IPC

## B. FIELDS SEARCHED

Minimum documentation searched (classification system followed by classification symbols)

Int.C1<sup>7</sup> A61B1/00-1/32, A61C19/00-19/10

Documentation searched other than minimum documentation to the extent that such documents are included in the fields searched

Jitsuyo Shinan Koho	1922-1996	Toroku Jitsuyo Shinan Koho	1994-2004
Kokai Jitsuyo Shinan Koho	1971-2004	Jitsuyo Shinan Toroku Koho	1996-2004

Electronic data base consulted during the international search (name of data base and, where practicable, search terms used)  
 JICST FILE, [SHOKI AND (MUSHIBA OR USHI OR USHI OR USHOKU OR USHOKU)  
 AND (KEIKO OR HAKKO)] (in Japanese)

## C. DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT

Category*	Citation of document, with indication, where appropriate, of the relevant passages	Relevant to claim No.
X	JP 56-40137 A (Robert R. Alfano), 16 April, 1981 (16.04.81), Full text; Figs. 1 to 8	1, 3, 5-7
Y	Full text; Figs. 1 to 8	8
A	Full text; Figs. 1 to 8 & FR 2463608 A1 & GB 2058343 A & CA 1161120 A	2, 4, 22 & DE 3031249 A1 & US 4290433 A & NL 8004712 A
Y	JP 2001-24223 A (Nichia Chemical Industries, Ltd.), 26 January, 2001 (26.01.01), Full text; Fig. 1 (Family: none)	8

 Further documents are listed in the continuation of Box C. See patent family annex.

\* Special categories of cited documents:

- "A" document defining the general state of the art which is not considered to be of particular relevance
- "E" earlier application or patent but published on or after the international filing date
- "L" document which may throw doubts on priority claim(s) or which is cited to establish the publication date of another citation or other special reason (as specified)
- "O" document referring to an oral disclosure, use, exhibition or other means
- "P" document published prior to the international filing date but later than the priority date claimed

"T" later document published after the international filing date or priority date and not in conflict with the application but cited to understand the principle or theory underlying the invention

"X" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered novel or cannot be considered to involve an inventive step when the document is taken alone

"Y" document of particular relevance; the claimed invention cannot be considered to involve an inventive step when the document is combined with one or more other such documents, such combination being obvious to a person skilled in the art

"&" document member of the same patent family

Date of the actual completion of the international search  
12 May, 2004 (12.05.04)Date of mailing of the international search report  
25 May, 2004 (25.05.04)Name and mailing address of the ISA/  
Japanese Patent Office

Authorized officer

Facsimile No.

Telephone No.

**INTERNATIONAL SEARCH REPORT**

International application No.  
PCT/JP2004/004861

**Box No. II      Observations where certain claims were found unsearchable (Continuation of item 2 of first sheet)**

This international search report has not been established in respect of certain claims under Article 17(2)(a) for the following reasons:

1.  Claims Nos.: 9-21, 23

because they relate to subject matter not required to be searched by this Authority, namely:

Claims 9-21, 23 relate to a carious tooth detection method including a step for acquiring fluorescent information on a measured portion, i.e., an object which does not require international search by the International Search Authority under the provisions of (Continued to extra sheet)

2.  Claims Nos.:

because they relate to parts of the international application that do not comply with the prescribed requirements to such an extent that no meaningful international search can be carried out, specifically:

3.  Claims Nos.:

because they are dependent claims and are not drafted in accordance with the second and third sentences of Rule 6.4(a).

**Box No. III      Observations where unity of invention is lacking (Continuation of item 3 of first sheet)**

This International Searching Authority found multiple inventions in this international application, as follows:

1.  As all required additional search fees were timely paid by the applicant, this international search report covers all searchable claims.

2.  As all searchable claims could be searched without effort justifying an additional fee, this Authority did not invite payment of any additional fee.

3.  As only some of the required additional search fees were timely paid by the applicant, this international search report covers only those claims for which fees were paid, specifically claims Nos.:

4.  No required additional search fees were timely paid by the applicant. Consequently, this international search report is restricted to the invention first mentioned in the claims; it is covered by claims Nos.:

**Remark on Protest**

The additional search fees were accompanied by the applicant's protest.

No protest accompanied the payment of additional search fees.

**INTERNATIONAL SEARCH REPORT**

International application No.  
PCT/JP2004/004861

Continuation of Box No.II-1 of continuation of first sheet(2)

PCT Article 17(2)(a)(i) and PCT Rule 39.1(iv).

## A. 発明の属する分野の分類 (国際特許分類 (IPC))

Int. C17 A61B1/24

## B. 調査を行った分野

調査を行った最小限資料 (国際特許分類 (IPC))

Int. C17 A61B1/00-1/32

Int. C17 A61C19/00-19/10

## 最小限資料以外の資料で調査を行った分野に含まれるもの

日本国実用新案公報 1922-1996年

日本国公開実用新案公報 1971-2004年

日本国登録実用新案公報 1994-2004年

日本国実用新案登録公報 1996-2004年

## 国際調査で使用した電子データベース (データベースの名称、調査に使用した用語)

JICST科学技術文献ファイル, [初期 AND (虫歯 OR 齧歯 OR う歯 OR う食 OR う蝕) AND (螢光 OR 発光)]

## C. 関連すると認められる文献

引用文献の カテゴリー*	引用文献名 及び一部の箇所が関連するときは、その関連する箇所の表示	関連する 請求の範囲の番号
X	J P 56-40137 A (ロバート・アール・アルファーノ) 1981. 04. 16 全文、第1-8図	1, 3, 5-7
Y	全文、第1-8図	8
A	全文、第1-8図 & FR 2463608 A1 & DE 3031249 A1 & GB 2058343 A & US 4290433 A & CA 1161120 A & NL 8004712 A	2, 4, 22
Y	J P 2001-24223 A (日亞化学工業株式会社) 2001. 01. 26 全文、第1図 (ファミリーなし)	8

 C欄の続きにも文献が列挙されている。 パテントファミリーに関する別紙を参照。

## \* 引用文献のカテゴリー

- 「A」特に関連のある文献ではなく、一般的技術水準を示すもの
- 「E」国際出願日前の出願または特許であるが、国際出願日以後に公表されたもの
- 「L」優先権主張に疑義を提起する文献又は他の文献の発行日若しくは他の特別な理由を確立するために引用する文献 (理由を付す)
- 「O」口頭による開示、使用、展示等に言及する文献
- 「P」国際出願日前で、かつ優先権の主張の基礎となる出願

## の日の後に公表された文献

- 「T」国際出願日又は優先日後に公表された文献であって出願と矛盾するものではなく、発明の原理又は理論の理解のために引用するもの
- 「X」特に関連のある文献であって、当該文献のみで発明の新規性又は進歩性がないと考えられるもの
- 「Y」特に関連のある文献であって、当該文献と他の1以上の文献との、当業者にとって自明である組合せによって進歩性がないと考えられるもの
- 「&」同一パテントファミリー文献

## 国際調査を完了した日

12. 05. 2004

## 国際調査報告の発送日

25. 5. 2004

## 国際調査機関の名称及びあて先

日本国特許庁 (ISA/JP)

郵便番号 100-8915

東京都千代田区霞が関三丁目4番3号

特許庁審査官 (権限のある職員)

安田 明央

2W 9309

電話番号 03-3581-1101 内線 3290

## 第Ⅱ欄 請求の範囲の一部の調査ができないときの意見（第1ページの2の続き）

法第8条第3項（PCT第17条(2)(a)）の規定により、この国際調査報告は次の理由により請求の範囲の一部について作成しなかった。

1.  請求の範囲 9-21, 23 は、この国際調査機関が調査をすることを要しない対象に係るものである。つまり、請求の範囲 9-21, 23 は、測定部位の蛍光情報を取り込むステップを有する虫歯検出方法に関するものであって、PCT第17条(2)(a)(i)及びPCT規則39.1(iv)の規定により、この国際調査機関が国際調査を行うことを要しない対象に係るものである。
2.  請求の範囲 \_\_\_\_\_ は、有意義な国際調査をすることができる程度まで所定の要件を満たしていない国際出願の部分に係るものである。つまり、
3.  請求の範囲 \_\_\_\_\_ は、従属請求の範囲であって PCT 規則6.4(a)の第2文及び第3文の規定に従って記載されていない。

## 第Ⅲ欄 発明の單一性が欠如しているときの意見（第1ページの3の続き）

次に述べるようにこの国際出願に二以上の発明があるとこの国際調査機関は認めた。

1.  出願人が必要な追加調査手数料をすべて期間内に納付したので、この国際調査報告は、すべての調査可能な請求の範囲について作成した。
2.  追加調査手数料を要求するまでもなく、すべての調査可能な請求の範囲について調査することができたので、追加調査手数料の納付を求めなかった。
3.  出願人が必要な追加調査手数料を一部のみしか期間内に納付しなかったので、この国際調査報告は、手数料の納付のあった次の請求の範囲のみについて作成した。
4.  出願人が必要な追加調査手数料を期間内に納付しなかったので、この国際調査報告は、請求の範囲の最初に記載されている発明に係る次の請求の範囲について作成した。

## 追加調査手数料の異議の申立てに関する注意

追加調査手数料の納付と共に出願人から異議申立てがあった。  
 追加調査手数料の納付と共に出願人から異議申立てがなかった。